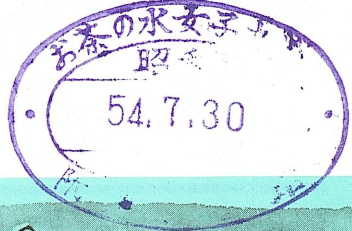


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

8



第七十八卷 第八号 日本幼稚園協会

新刊案内

育ち育てる絵の指導

林 健造・著

B6判・200頁・定価900円・送料160円



幼い子どもの絵は子どもの心の世界を表わしています。一見不思議な描線も豊かな心の表われと
思って見てあげたいものです。そんな子どもの絵の見方、育て方についてアドヴァイスします。



くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課 (03) 292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十八卷 第八号



1340.

幼児の教育 目次

第七十八卷 八月号

© 1979
日本幼稚園協会

表紙 油野 誠一
カッタ 中島 英子

はるけき憶い出とせつなるねがい……………浅山 英一 (4)

★講演

保育の理論と実践

——幼児教育をめぐる最近考えること……………佐藤 文子 (6)

「幼児の教育」復刻並びに復刻記念懸賞論文募集…………… (14)

夏休みと子ども

卒園生とのキャンプ……………折原 祥子 (16)

自然とふれあう野外活動のすすめ……………瀬沼 克彰 (20)



子どもキャンプでのふれあい……………藤崎真知代…(24)

夏休みの図書紹介……………村石京子…(28)

森田明…(32)

本田和子…(36)

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その十二)……………海老沢 敏…(41)

私の保育……………水沼 昭子…(48)

雑感……………福永 恭子…(54)

◇児童文化探訪

海ほうずき……………皆川美恵子…(58)

はるけき憶い出と

せつなるねがい

浅山英一

夏になると子供のころの水のあそび、泥んこのあそびがたのしく想い出されてくる。

暑いから水や涼しさなどが日常の生活やあそびの友達となつてくるのだが、私は幼年の時代を越前の敦賀で過したので、水や土にあまり恵まれていない大都会の子供たちの想い出などは到底想像もつかない。

敦賀の町は到るところに清水が湧いていて掘抜井戸はどこの家にもつくられていた。冬はあたたかく、夏は冷たい水が間断なくわき流れていた。あふれる水はブリキ製の樋から流れ出し、溜りには牛乳びんや何かが冷やされていた。街の駄菓子屋の店先では掘抜の水の中に葛まんじゅうが行儀よく並んでいてお客の来るを待っていた。私は今でももしそのような店があったら買ってたべてみたいと思う。

駄菓子屋の掘抜水には子供のほしがらラムネやミカン水が

冷やしてあったし、別のコーナーには水鉄砲やメンコの類、ハマグリの貝がらにつめた三色の飴などが売られていた。小学校で夏休みがはじまると、駄菓子屋の店先はふだんより子供の数が多くなって喚声があがったり、女の子の泣き声などが夕方までつづいた。

また店の軒下にはバケツが下っていて、サイフォンを利用した玩具があった。水が噴水となって、ブリキの羽車を回転させると、その効力はとりつけた福助人形がブリキの太鼓を叩く仕掛であった。この福助もブリキを打ち抜いたものであやしげな塗料で色づけしてあった。バケツの水がなくなるまで福助人形は顔に汗ならぬ水しぶきを滴らせながら金の太鼓をテケテケと叩いていた。買っても錆びて一夏ともたない玩具ではあったが、今そんな玩具はどこデパートへ行っても見かけたことがない。

また、水写真というおもしろい写真があった。たね紙という印画紙にうすい桃色の紙をあてがって水で濡せば即席に現像できて、どこかの街の景色などがおぼろげにあらわれた。今でも私は、写真のプリントを見るとき、どこか頭の隅でその水写真のことを思い出すのだが、どんな仕掛でその印画が

できあがったのか見当もつかないし、それをさがしてみようとも思わない。その水写真は私の臉にすっかり焼きつけられているからである。

そんな五、六歳のころ、私の家は氣比神宮に近いところにある、庭はソメイヨシノが幾本も二階の屋根までとどいていた。屋根根に出て摘んで花房を母は塩漬にしておき、夏にはお茶代りに出してくれた。今、どこかの結婚披露宴でサクラ湯が出る私の眼にはそのころのサクラと亡き母の面影とが二重の映像となって浮び上ってくる。

ボタンの花に顔をつつこんで、目も鼻も花粉にまみれた私を見て母は笑いこけていたことも忘れられない。

ムクゲの垣根で近所の女の子とゴザをしいてままごとをしたとき、ムクゲの葉を水でもみ、絞り汁をビンにつめて油屋さんごっこもよくやった。

夏は日蔭に床下から吹き抜けてくる涼風が吹き、そのあたりをよくみると乾いた土が小さなすり鉢のように凹んでいてアリが落ちて吸いこまれてゆくのをみたりした。

そのころに庭で見たチューリップの花が、真黒であったのは強い印象で残っているが、大正の七、八年ころに既に黒チ

ューリップがあったのだと、専門学校で花卉園芸を専攻はじめたころになっておもしろい出しておどろいた。

コデマリは物置小屋のかたわらで滝のように白く垂れて咲き、父が裏の畑にまいたダイコンに黒い虫が一ぱいに這って葉をすっかり網の目のようにしてしまったことなど、子供のころのあそびの中に、花あり、虫ありといった幼年のころを併せであったと思うようになっていく。

また、その頃の私には何故か紙を大切なものとおもいこむ癖があり、帳簿の断ち落しの紙をどこかでたくさん貰ってき、画や字をかいて遊び、それを捨てないで糸でとじてしまっておいたりしたのを覚えている。

今にしておもえば六〇年も前のこと、過ぎた年月ははるけくも長くかつおどろくほど短かかったと思われるが、いまだに画を描くあそびは忘れられないし、字を書いてそれを一冊にまとめる癖は死ぬまでなおりそうもない。

大人は、今の自分を大人だと思っているものだが、考えてみれば、云うこともなすことも好きなこともきらいなことも三歳から六歳ぐらいのときと全く本質的には少しもちがっていないことに気がつくのである。

★講 演★

保育の理論と実践

佐藤 文子

——幼児教育をめぐる最近考へること——

〔一九七八年九月二〇日に幼児教育
現職研究で行なわれた講演より〕

御紹介いただきました佐藤です。

先程、本田先生が現場との共同がうまくいっているようなこととおっしゃいましたが、実は今、幼稚園から少し遠のいています。研究の視点について、また共同研究のあり方について、いろいろと問題を感じておりますので、今日は私が最近考えていることの二・三を述べさせていただきます、皆さんの御意見や御助言をいただければと思っております。

私は、大学では幼児心理学の担当ということになっていますが、臨床心理学から幼児にかかわるようになりましたので、幼児教育の領域に迄、臨床心理学的な問題意識をもち込んでいるのかもしれない。それでこういう場で私事を話すのも思いますが、私の歩んだ道について一寸述べさせていただきます。

私、大学は英文科出身ですが、大学時代の終り頃から興味・関心が少しずつ別の方向へ向かうようになりまして、哲学・宗

教学の先生の研究室によくお邪魔していました。そしてブーバーとかフランクルなんかを読んできましたが、その先生が「臨床的な人間理解」とか、「人間関係」ということをばをしょっちゅう口にされるものですから、私もその影響を受けながら、次第に心理学の方へ向かうようになり、遂に大学院で心理学を勉強することになりました。大学院では最初の頃、これも教授の助言もあってサリバンを研究していました。

ブーバーは、ご存知のように、人間の基本的なあり方を、関係における存在として哲学的・人間的に基礎づけようとした。またサリバンは、精神分析学の流れをくむ精神医学者ですが、社会的観点を重視し、精神医学を、人間関係を研究する学問と定義しました。

ここで一寸精神分析にふれさせていただきますと、フロイトはヒステリーの治療から精神分析を始めました。当時、ヒステ

リーの患者を催眠療法で治療している時に、たまたま患者が昔の不快な経験を思い出して口にした。ところがその後ヒステリーの症状が消えた。そこでフロイトは過去の不快な経験を抑圧することからヒステリーのいろいろな症状が出てくるのだと考えたのです。そして更に多くの患者について治療経験を重ねながら、精神分析の技法と精神分析学の人格理論を発展させました。このようにしてフロイトは幼児期の体験を非常に重視するのですが、性的な体験を特に重視しました。これに対してサリバンは幼児期の人間関係を非常に重視しました。

フロイト以後、ヒステリーだけでなくさまざまな神経症の治療にも精神分析が適用されるようになりませんが、精神病、特に分裂病には精神分析を適用することはできないと長い間考えられておりました。ところがサリバンは分裂病患者と接触しながら、初期の人間関係の歪みが分裂病という重篤な精神病に至らせるのであり、人間関係の中で安全を感じることによって、分裂病患者も回復しうることを知ったのです。分裂病は内因性疾患で治療不能と長い間考えられていたのですから、サリバンのこのような知見は精神医学界において非常に画期的なことだったわけです。

大学院ではこんなことを勉強しておりましたが、実際にはな

かなか臨床経験がもてず、またその機会があっても指導をしてくれる人がいません。その頃たまたまアメリカに留学する機会がありまして、二年半あちらで臨床訓練を受けることになりました。

アメリカでは、臨床心理学で学位を取るためには、大学院での授業と論文の他に、最低一年間、アメリカ心理学会公認の施設で臨床訓練を受ける必要があります。私もそのインターンプログラムに入れてもらったのです。大学院の教育そのものが日本と大分違っている上に、ことばのハンディキャップがあり、最初は大変苦労いたしました。

そんな時、ディレクターから「子どもの方をやってみてはどうか」と言われました。最初、滞在予定が一年間でしたし、それにアメリカでは児童精神医学は一般の精神医学を学んだ後にやることになっています。それで短期間の中にあまりあちこち手を出すよりとは思っておりましたので、一寸躊躇いたしました。——実は私が渡米する直前になって心理学部門のディレクターが変わりまして、新しいディレクターはドローリエと言います。小児分裂病や自閉症の研究をしている人でした。当時——私が渡米したのは一九六七年ですが——日本の精神医学界でも自閉症は大きな問題となっていました。日本では自

閉症の定義とか分類に精神医学者の関心は向けられていて、なかなか治療の方法を考えるとどこまでいっていなかったようです。そういう状況において、ドロリーエが自分の理論をもって自閉症児の治療にあたっていることは非常に魅力的でした。それで最初の自分の計画にこだわるよりもディレクターの専門とするところを学んでいくのもよいのではないかと思ひ直し、子どもをやってみることにしました。これが幼児にかかわるようになった最初と言ってよいでしょう。

ここでは、自閉症の理論を検討することが目的ではないのですが、一寸ふれさせていただきます。当時、日本でもアメリカでも、自閉症の病因に関して、親の拒否的な態度が原因で自閉症と呼ばれる症状が出てくるのだという考えが有力でした。これに対してドロリーエは、自閉症児は生来的に神経生理学的障害があつて情緒的、感覚的刺激を受入れることができないのだと考えるのです。私たちはいろいろな刺激にかまれていながら、それらを構造のある環境として理解し、受入れ、かかわっているのですが、それができるためには、感情的情緒的要素が重要な役割を果しております。ですから情緒的な刺激を受入れられない自閉症児は学習、従つて発達に大きな支障が出てくることとなります。病因についてのこのような考えから、治療の

方法が導き出されますが、普通の子どもが成長、発達の過程で経験する人間的情緒的刺激を、自閉症児の神経生理学的障壁を越えて子どもに達するように、強力に与えることが治療の中心となります。

さて、私たちは彼のこのような考え方を理解し、治療のデモンストレーションを観察します。ここでは、人間のかかわりをもたないと言われている自閉症児が、まるで彼を待っていたかのように反応し、一緒に生き生きと動いているのです。そこで私たちも自分に与えられたケースについて、同じ方法でやってみるのですが、なかなかうまくいきません。こちらから積極的にはたらかかけないかぎり自閉的な子は動きません。一緒に何かしようと思うとやたらに動き回り子どもを引きずり回し、両方ともくたくたになってしまいます。彼はそういう場面を見て「あなたは一体何をしていたのか」ときくのですが、そこで自分の行動をふり返つてみると実に無意味な動きの連続なのです。

ゼミとかスーパービジョンで話し合っている時はわかったように思えても、実際に子どもとむかい合うとうまくいかない。どうしようもなくいる時に、彼が入ってくる。そうすると子どもは生き生きと動き始める……それはまるで彼の人格の中に子

どもをひきつける魔力でもかくされているかのようなのです。そこで私たちは、彼は理論というけど、彼のパーソナリティが治療を可能にしているのではないかと彼に言ったのですが、彼は「私は自閉症をこのように理解し、治療の方法を考え出したのだ。だからこの理論を正しく理解してやれば誰にでもできる」と主張するのです。

それで私は臨床における「理論と実践」とはなんだろうかとつくづく考えさせられました。理論というのは普遍的なもので、誰がやってもこうなるというものでなければならぬはずで、しかし臨床の場合、なかなかそういかない。そこで技術が悪いからだということになる。アメリカの臨床訓練ではスーパービジョンが非常に重視され、そこでは私たちが臨床場面で行なっている言動が本当に適切なものであるのかどうか吟味されます。確かに理論は適切な技術を通してその効果を発揮するので、そのためにも技術の習熟は臨床に携わる場合、欠かせないことです。ですがそのことは一寸おいておきます。先にも申しましたように、私はゼミとかスーパービジョンを通して、ドローリエの理論を理解したつもりでいました。彼はキャンサス市に来る前にシカゴで自閉症研究のプロジェクトをもち、丁度私がキャンサスにいた頃、その結果を本にまとめて

いました。私とその本を読んだのは、子どもの臨床を終えた頃でした。そこで私が感じたことは、先に私は彼の理論を理解したつもりでいたけど、結局私の理解は一つの知識にすぎなかったのではないかとことです。彼は長年にわたって大勢の子どもについて経験してきたことを自分のことばで体系化したのです。それに対して私は彼の考えを知識として受入れ、彼の行動を模倣していたにすぎないのです。結局、当時私にとって彼の理論は、そこから行動が導き出され、また行動がそこに位置づけられるような私の理論にはなっていなかったのです。当時私の治療がうまくいかなかった主な理由はこんなところにあったのではないかと考えられるのですが……。

次に、今、ドローリエが自分の経験をことばで体系化した、すなわち理論化したと申しましたが、このことについて少し考えてみたいと思います。経験というものは言語的に客観化されない限り、他の人と共有することもできないし、また思考の対象にもなりません。でも経験を言語化するということは実に難しいことだと思ふのです。これは単に技術の問題ではなく、経験とことばという両者の性質によるのではないかと考えます。このことは心理療法とか精神分析の本質にかかわってくるのではないかと思いますが、心理臨床において重要な人間を理

解するということとの関連で考えてみたいと思います。

心理診断ということがあります。これは心理テスト等を用いて相手の心的状態を知ることです。標準化されたテストを用いる場合は、誰がやっても同じ結果が出て、同じように解釈されるということが前提となります。一方、心理療法や精神分析は、面接者と被面接者の相互関係に基づく自己理解の過程です。両者がかわり合う中で、被面接者は自分の問題に気づき、変化していく。これは診断の過程であると同時に治療の過程であるのです。両者の関係の中で、被面接者はそれまで気づかなかった自分の感情や気持ちに気づくようになるのですが、それは言語化されることによって明確になります。が言語化——対象化した時、真の自分は一歩前に進んでいるのです。対人状況における事象を言語化することはいつも事象の後を追いかけているようなもので、事象はいつも言語をすり抜けてしまうように思われるのです。こうした状況において私たちが共有しているのは、非常にきめの荒い理論なのではないでしょうか。

先人の理論を受けついで、自分自身を道具に臨床活動に従事し、そこで自分の経験を反省する時、どうしても先人とは違った理論が生れてくるのではないのでしょうか。精神分析の歴史をふり返ってみる時、フロイト、ユング、アドラー……と精神

分析学の基本を共有しながら、それぞれが異なる理論を展開しているのも、それぞれが対象とした患者、そして関心のむけ方が違っていたというだけでは解釈しきれないように思われます。そして私には偉大な先人たちも臨床経験の大事な部分を理論化しませんでしたのではないかと思われるのですが、この詳細については別の機会にふれたいと思います。

さて前おきの部分が非常に長くなってしまったのですが、教育の実践においてもこれ迄述べてきたような理論と実践のずれ、あるいはギャップがあるように私には思われるのです。教育の実践において保育者の理論と行動はどれだけ一致しているのだろうか。ずれているとすればどうして、どのようにしているのだろうか。そしてそれは幼児にどのような影響を与えるのだろうか。そんな関心から保育場面を観察いたしました。

しかしここで大きな問題にぶつかりました。それは観察者としての私の立場からくるものですが、まず、保育者との話し合いの難かしさです、それは意見の相違以前の問題のようです。

アメリカの臨床訓練ではスーパービジョンとかカンファレンスが非常に重要視されます。これらは、単に患者の問題を話題にするのではなくもっと別の機能があるようです。つまり、患者の問題を自分の問題として人々の前に出すことにより、自分自

身の成長の機会となるのです、実はこれがなかなか大変で、私は最初スパーバイザーと向き合うと防衛的になってしまつて、患者さんに会うより苦痛でした。しかし、だんだんと回を重ねるに従つてスパーバイザーともオープンに話し合えるようになってきました。ところがその頃になって患者さんとも前よりもっと自由に会えることに気づいたのです。

私は、保育者との関係をスパービジョンの関係とは考えてはいないのですが、単に話し合いの場としては解決できないようで、いずれ両者の立場、役割をはっきりさせなければいけないでしょう。

次に、当然ながら保育者は見通しをもつて保育をしておりますので、結果の見通せない変更を保育にもちこむことには大きな抵抗があります。学部と附属、大学と現場との共同と口では簡単に言つても本当の共同とは何かということを双方が真剣に考えない限り、保育についての共同研究はできないのではないかと思います。

保育の理論を実践に密着したところで確立する仕事を大学と現場で行なうためにはまだまだ多くの難問が残っているようです、

次に、幼児教育の内容に関わる問題かもしれませんが、幼児期に本当に必要な経験は何だろうかということとです。これは幼児教育に関係すれば、当然つき当る問題ですが、最近特にこのことを考えさせられるようになったきっかけの二つをお話しいたします。

一つは、一昨年来、秋田大学幼児教育研究会が、都市化社会における幼児教育のあり方を探るために一連の共同研究を行なつてきました。私は「幼児の生活と発達」を分担しまして、秋田県で都市化の程度の異なる三つの地域——秋田県で最も都市化の進んでいる秋田市、秋田県の代表的穀倉地帯で小都市近郊にある平場農村、宮城県、岩手県の県境、栗駒山麓にある山村——の幼児の生活と発達を比較検討しました。結果は、地域による差は予想よりも小さかったのですが、またそれなりに一貫しており、幼児の発達に及ぼす地域環境の影響を考えさせられました。私達は都市↓農村↓山村の順に都市化がおくれていると考えたのですが、幼児の生活と発達においては、意外にも、山村の方が農村より都市に近い姿を示しました。

従来、農村の子どもの知的発達は都市に比べて遅れている、特に言語面において遅れていると言われてきました。平場農村はこのような農村的特徴を強く示し、絵を描いたり、積木を積

んだりという動作的な面では進んでいるのですが、言語的表現能力が非常におくれています。山村は環境的に不利と思われるような側面に関連するところではおくれています。概して農村より都市に近い傾向がみられました。

この解釈についてまだ結論は出ておりませんが、都市においては、刺激や情報が多く、個人の中にさまざまな欲求をかりたてるような条件がそろっています。そこで子どもは情報を選択し、欲求をコントロールすることを学ばなければなりません。で、親の教育的統制が強まりますが、都市では核家族が多く、親の教育的期待や圧力がストレートに子どもに影響しがちのようになります。また子どもの数も少くなり、育児経験のない親も多く、親自身刺激や情報過剰の中で不安定になります。このように都市では親の教育的期待や圧力が子どもの発達を早めているのではないかと思われませんが、一方で情緒的不安定になりがち子どももいるようです。

山村の場合は、地理的不便さや気象条件の厳しさが自然の統制になっており、また複合家族が多く、時には家族内の葛藤もみられるようですが、親の期待や統制がストレートに子どもに影響することは都市の場合より少いようです。

対象地域の農村は、小都市近郊にあつて、最近はいマイカーの

普及で交通も便利になり、都市化に伴う生活の便利さという恩恵を受けながら、都市ほどストレスも多くないという状況の中で、また家族形態は複合家族が多く、親自身が問題にぶつかり、自分で判断し解決していかねばならないような問題場面が少いのではないかと思われるのです。農村では子どもがほしがるものを買ひ与え、子どもがしたいことをさせるにまかせるような親の態度がうかがえるのですが、このような状況下では、子どもの生活に対する親の教育的統制はどうしても弱くなりがちなのでしょう。

あれこれ思いめぐらしながら、幼児期にはどのような経験が必要なのだろうか、幼児教育における家庭と幼稚園の役割を考えさせられます。

第二に、私は大学で主として幼稚園教員志望の学生の指導に當つております。私も年を取ってきたせいか、「今の学生は……」「今の若い人は……」ということがつい口に出ます。学生と接触して感じて感じることは、非常に現実的であるようです。本当の意味の現実感覚に欠けているのではないかということです。たとえば、アルバイトの家庭教師の報酬とか、洋服代、コピー代等についてはどが高いとか安いとか実に敏感です。ところが父親の収入がおよそどの位で、自分の学費は家計のど

の位を占めているのか、見当もつかない学生が意外に多いのです。また、国立大学がどのように運営されているのかわからない。運営というところが、国費でまかなわれており、父親や友達が払っている税金もその一部である……といったことです。何か経験や知識が一つ一つバラバラで、環境の諸事象を関連あるまとまりとしてとらえていないようなのです。

また自分の立場と異なる人に出会うと頑固に抵抗し、あれかこれか決着をつけないと気がすぎず、良いことと思うとわき目もふらずつつ走り、意外にもろく挫折する、こんな特徴もみられます。私は、結局自我が十分発達していないのではないかと思うのですが……。つまり問題場面にぶつかり、自分で判断し、行為する、そしてその結果を見きわめる過程で、環境に気づき、自分に気づく。こうしたくり返しの中で、自分を確信し、自我が発達していくのだと思うのです。そして自分の欲求と環境の要求を調和させようとする努力の過程で、思考の柔軟さもでてくると考えられるのですが、どうも今の学生にはこうした経験が欠けているように思われるのです。

こうした特徴は、私の接触している学生の特徴で、「今の学生は」と一般化することには問題があるのかも知れませんが、先に述べた農村の子どもの姿と共通するところがあるように思

われるのです。——実際には農村出身の学生はそう多くないのですが——。

そんなことで、今の学生はどんな幼児期を過ごしてきたのだろうか、今の幼児は何年か後にどのような青年に、そして大人になるのだろうかと考えてしまいます。

幼稚園教員養成ということを考えると、どういう保育者を養成するのかの前に、どういう人間になるのかが一そう重要なことと思われまます。発達の過程は社会化の過程でもありますが、老人、成人、青年、児童、幼児それぞれが、それぞれに適切な役割を荷ない、責任を果しながら出会うところに、社会の秩序も生れ、文化の伝承もなされると考えるのですが、幼児のような大人、大人のような幼児が多くなっている昨今、幼児教育はどのようになっていくのかなとつい思ってしまう。

大変悲観的なことを申し上げました。最近の幼児教育の普及と前進については、すばらしいと思うことも多々あるのですが、私自身極めて自閉的な興味や関心から子どもを観察して参りましたので、この辺りで少し問題を整理し、視点をはっきりさせて再出発しなければと思い、私の問題を多少誇張して述べてしまったように思われます。御意見や御助言をうかがえれば幸いです。

(秋田大学)

『復刻・幼児の教育』

『幼児の教育』一巻〜二十巻までの復刻が完成しました。

「我国教育界の刻下の急務は、児童教育法の研究と、母としての婦人教育の普及にある」とうたい上げた創刊号を手にすると、当時の関係者たちの熱い息吹きが伝わってきます。

明治三十四年、保育界は、創設の混沌の中から、漸く、新しい方向をつかまえていたのです。

そして、巻を追うごとに、日本の保育の成長の道すがら明らかになってきます。それは、大正期へ向けて徐々に夢をふくらませ、やがて、「誘導保育」という形で華麗な花を開かせていくのです。

従来、この雑誌は完全な揃いがなく、閲覧の困難さが数かかれていましたが、この度、関心を抱く多くの人々の傍におかれるべきものと考え、復刻刊行に着手致しました。過去を問い、現在を考える手がかりとして、広く活用されることを願

っています。

全二〇巻、別巻一、A5判、クロス装、外函入 題字・東山魁夷、別冊記念論集

《一巻〜二〇巻》『婦人と子ども』明治三十四年〜大正七年

『幼児教育』大正八年〜大正九年

編集委員 津守 真

本田 和子

堀合 文字

〔刊行〕名著刊行会 〔価格〕現金価格 一八六、〇〇〇円

〔申込・問合わせ先〕総発売元・株式会社コーディック

東京事務所 東京都千代田区神田神保町一―四七

大森ビル TEL 東京（〇三）二九五―〇一八六

本社 大阪市東区今橋二―二二 藤浪ビル

TEL 大阪（〇六）二二七―五三四一（代）

『幼児の教育』復刻記念懸賞論文募集

このたび、雑誌『幼児の教育』復刻を記念して、左記の要領で論文を募集することになりました。多くの方々が、優れた論文をおよそくいただきますことを、期待しております。

〔記〕

一、復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みたものであること。

一、応募期日 昭和五十五年九月末日まで

一、応募要領 ペン書き(またはボールペン)とし、四百字詰縦書き原稿用紙に四十枚以上百枚

以内。上表紙に「復刻記念懸賞論文」と朱書の上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入のこと。審査は上表紙を外し、本文のみを対象

として行ないます。尚、名前入りの原稿用紙は御遠慮下さい。

一、賞金及び賞品 最優秀賞一名 賞金二十万円

二等賞 二名 五万円

三等賞 三名 一万円

参加賞 全員 記念品

最優秀論文は、本誌に掲載いたします。

一、問合わせ及び応募先

〒112 東京都文京区大塚二―一―一 お茶の水女子大学附属

幼稚園内 日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

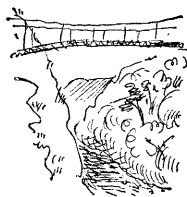
尚、電話での問合わせは御遠慮下さい。郵便でお願いいたします。

主催 『幼児の教育』編集部
後援 株式会社コーディック

卒園生とのキャンプ

私の園では、七月の下旬に、毎年卒園生のキャンプを行なう。これは、八年程前から、細やかに続いているものである。

卒園すると、子供達の様子を知る機会が、ほとんど無くなってしまふこと、又、私自身が小学生の頃、毎年夏休みに入ると、宿題を抱え、山形の田舎に行き、川や畑を相手に、自然の中で過した楽しい思い出があり、大人になった今でも、自然の中にいる事が何よりも好きで、成長した子供達と一緒に、自然の中で過したいと云う単純な気持が、幸い、丹沢が近い距離である事も合わさって、始まったようである。



折原祥子

毎年二〇名前後の子供達と一緒に、思う存分山の空気を吸ってこようと、一泊で出掛けるのである。

〈キャンプ場のこと〉

私達の過すキャンプ場は、西丹沢にあり、御殿場線の松田から、バスで三〇分程山に入った寄^{ヤドカリ}という所にある。

バスの終点から、川に添ってテクテク二〇分、田んぼの中を歩いて行くと、町に近い場所とは思えない程山奥に感じる山裾の川原に、小さな小屋が建っている。

私が学生の頃、十五年位前になるが、始めて行った頃と比べると、大分便利になり、変わってしまったが、小屋のおじさんの自然を愛する心と、それを、今の子供達にわかつてもらいたいと、一生懸命努力している姿は変わらず、感動させられるものがある。

「今の大学生は、歩きたがらず、ラジオを手放さず、山に来て、お風呂に入りたいなんて云うから、川に投げ込んでやったよ。」と、嘆きながら話してくれる。

〈山の生活〉

あまり背負った事もない大きなリュックにいろいろ詰め込んで、大鍋など炊事道具を持ち、フーフー云いながらやっとたどり着く。

お昼に、お母さん手作りのお弁当を、川原に座って食べる時の子供達は、疲れも忘れて、とてもうれしそう。涼しい風と、足元のきれいな水、お弁当もそこそこに、すぐ水に足を入れる。

食後、さっそく水着に着替え、おやつを持ち、十五分位山道を歩いて、上流に出掛ける。その場所には、緑の木々と、

透き通って流れる水と、川原の大小の石がある。

嬉しい事に、人間がほとんどいない。そして夏の暑さを吹き飛ばす大きな滝がある事が何よりだ。

子供達はさっそく活動開始。幼稚園の子供とは、又違うダイナミックな活動を、自然を相手に始める。川はあまり深くないので、泳ぐ為に石で塞止める。皆で大小の石を運び、流れに逆らって、せっせと積み上げ、少しずつ深くしていく。塞止めるのも、石の並べ方等かなり考えなければならぬ。

そのうち競争のようになり、あちこちに泳ぐ場所や、自分達のお城が出来る。

川の水は冷たいので、唇を青くしながらも、水に潜ったり、出たり入ったりして遊ぶ。

付き添いの私達も、一緒になって夢中で石を運んだり、川を漕いで歩いたりと楽しみなが、たまに思い出したように、「唇が青くなっているから水から出ましょう」と声をかける。

夕方迄水遊びをした後は、夕食を準備する。目をこすりながら炊いた飯合の御飯に、大鍋で作ったカレーをかけ、川原の石をテーブルとイスにして食べる食事は、何とも云えず、皆すごい食欲で、大鍋をたいらげる。

後片づけをしながら、キャンプファイアーの薪を積み上げて準備し、夜は、花火大会とファイアーを楽しむ。

涼しい山の夜は、星がとても美しい。

翌日は、朝のすがすがしい空気の中で体操をし、朝食の準備が始まる。

片づける頃には、「早く滝に泳ぎに行こう。」と大騒ぎであるが、そこを少し我慢して、お昼のおむすびをにぎり、パーベキューの準備をして、まず食物の確保である。

手分けて、薪、材料など持ち、昨日の場所に勇んで出掛ける。そして水の中に入ったり、出たりの繰り返し、自然の中に解け込んで、何の道具が無くても、飽きる事なく楽しむ。水の枯れた滝を、上流迄探険したり、美しい石をみつめたりと自由に遊ぶ。

お昼になると、川原で火を燃し、パーベキューをしながら、自分達でにぎった、ちよつと変形したおむすびをほおばり、体を暖めて、夕方迄、又水遊びをくり返す。

こういう時の子供達の様子は、実に楽しそうで、次々と遊びをみつつけていく事が出来る。もう一泊したいという子供達と、責任上、いささか疲れが出て来た付き添いは、楽しかった余韻を残しながら、おじさんに見送られ、帰路につくので

ある。

〈ある出来ごと〉

ほとんどこのような生活で、毎年のキャンプは終るのだが、ある年、ちょうどつゆ明けにぶつかり、着いた頃より雨が降ってきてしまった。それが夜になると、大雨注意報が出る程になり、機動隊の方が見回りに来て、もしもの時には避難するようにと注意があり、責任者は、打合わせをするまでになってしまった。子供達は、そんな事は全く知らず、部屋の中でゲームをして、楽しそうに大騒ぎをしている。

夜八時頃になると、川が増水し、川原もなくなってしまう。大きな岩が雷のような音をたてて流れて行く。

昼見ると、とても機械でも動かないような大岩が、水の流れで木の葉のように流れていくのである。

私も始めて見る自然の力に驚いてしまった。おじさんが、子供達に、「いつでも見れるものではないから。」と、川のそば迄連れていってくれる。

濁流がすごい勢いで流れ、岩を押し流している。子供達も、初めて見るこの川の様子に、びっくりし、「川が怒って

いるよ。」という言葉が出て来る。

「あの岩がかくれたら、危ないから避難する。」とおじさんは、それ迄の経験から、ちゃんと知っているのである。

昼、水遊びをする川とは、全く別のようになり、自然の大きさ、恐ろしさを知らされた。雨が止まなかったら起すから、と子供達を早目に寝かせたが、私は心配で寝る所ではなく、雨の音を聞きながら、早く止んでほしい。無事に帰れる様に、と祈るばかりであった。

うとうとして、ハッと気がつくと、いつの間にか雨は止んでいた。そーと外に出てみると、素晴らしい満天の星空に、月が輝いている。星が今にも落ちてきそうに思える。

私もこんな美しい星空を見たのは数少ない。感激のあまり、部屋にとび込むと、子供達を端から起した。

寝ぼけ眼で起きた子供達は、外に出ると、星の美しさに見とれ、しばらくの間、皆で、雨上りの美しい空を、寒さも忘れて眺めていたものである。

この時の自然との出会いは、いつものキャンプでは経験出来ないものであった。でも、本当に素晴らしい出会いであったと思う。

今、中学三年生になっているこの時の子供達は、あの時の

星のきれいだった事と、川のすごさは忘れられないと云う。

私も同じである。

このような、大きな自然の中に入った時、あの年齢の子供達は、どのような感じ方をするのだろうか。

私にはわからないが、各自がそれぞれ、何かを感じとってくれるだろうと思う。

「楽しい」「楽しかった」という事だけで良いのかも知れない。

一泊のキャンプだが、早くから楽しみにしていて、四月頃から「今年はいつ?」「今年も行くから……」などと云われると、「又行きましようね。」と云ってしまふ。

準備のために集まり、買物と云っては集まり、反省会と云っては又集まる事も楽しいようだ。

食べて、片づけての繰り返しと、水遊びのキャンプだが、これからも、続けられるうちは続けて行きたいと思ってる。

(神奈川・松ヶ丘幼稚園)

自然とふれあう野外活動のすすめ

瀬沼克彰

1、幼児体験の重要性

成人の生きがいや自己実現を主たる研究領域としていて、近頃、つくづく考えさせられるのは、幼児体験の重要性ということである。特に、人間の一生の中で結実期であり、本来、静かな豊かさの中で生の燃焼が燃えつきる老人の日常性を観察すると、その感が強い。経済的な自立と健康維持が何にも増して重要なことは、いうまでもないが、この二つの面においてめぐまれた生活をしているにもかかわらず、第三のあり余る自由時間をもて余してしまっている人が何と多いことか。

第三の余暇の充実がなければ、前の二つの条件が、いくら整っていても、生きがいや自己充実は、感じられない。くる日もくる日も、なすこともなく、友人とムダ話をする日もなく、テレビの前に、ただ座っているという悲しい存在にな

っている。

さて、幼児の遊びについて書くにあたり、いきなり、私は、数十年後の老齢期より話をスタートさせた。それは、時々の私のくせであるが、対象を考察するに当たり、最終段階から逆もどりして対象をながめるという方法を本稿でも取っているからである。

そこで、ふたたび、老人の話にもどると、多くの人々が、余暇の充実を行う知識と技術に欠けている。或いは、かつては、両方とも持っていたが、数十年にわたる宮仕えと仕事にふりまわされる生活の中で、どこかへ、それらを置き忘れてしまってきたことになる。気がついた時には、生活を支える資金と幸いなことに身体だけは健康にめぐまれたが、老後は、何をしたらよいかわからないということになってしまった。

こうした多数派に対して、現在では、少数派に属するが、

子ども時代から、好きなものをひそかに温めて、長い人生の中で、時間をかけて育ててきた人もいる。彼らは、たとえば、

職場の中での地位が、若干低かろうが、年取が、少し位、安かったとしても、老後において、はるかに、前者よりも、生きがいのある人生を過ごすことができることは間違いない。

両者は、一体、どこで、どう差がついていくのであろうか。私は、幼児の世界の専門家ではないので、幼年時代についての詳しい知識は、そんなに持っていない。しかし、青年期以後の多くの人々の手記、体験記、作文などの資料、調査の過程で行う面接、ヒヤリングなどを通じて思うことは、成人以後の生活志向と意識の原点が幼児の時代に形成されていることを見出すことが多い。(拙著『余暇と生涯教育』学文社)

文学の世界では、好んで扱われているテーマであるが、幸せな幼年時代を過ごすことが、人生で幸福を見出す最善の道だということとは、私の専門領域でも真理である。幼児期に、何か好きなことに夢中なること、思い切り、遊びまわること、友達と、どこか遠くの野山へ出かけて帰りが遅くて、両親にしかられること、等々、あげれば切りがないが、こういうことが大切だと思う。

2、遊びを奪われた子ども達

現在、六〇代、七〇代の老人達の多くは、右のような経験の一つや二つは、かならず持っているだろう。「まったくない」という人は例外であろう。また、私が本稿で、一番いい野外活動のすすめというに関して、野山をかけずりまわり、小川で魚取りをしなかった人も少いであろう。

だが、老年期になると、多くの人は、そうした幼児体験は、長い年月の中で風化し、原形をとどめず、あとかたもなく、どこかに四散してしまう。そして、ほんの少数の人のみが、それを温く育て上げ、ほんのものものとして自分の中で生きつづけるということになる。よく言われることだが、人生は、かくも残酷である。

ところで、現在の子ども達は、どうであろうか。極論になかも知れないが、かつてのように、幸せな幼児体験を持つことのできる子ども達は、何%位いるのであろうか。もの心がつく以前から、間違っても彼らの関心や興味をひくはずもないパズルや、命令されて書かされる「お絵描き」、何の役に立つのか、まったくわからない習字、日本語も、わからないというのに、英語のレッスン、そこらをとんで遊びまわりたい

くてしかたがないのに、毎週、通わせせるピアノ、ヴァイオリンのおかげご事、等々、で形づくられている。

ここでも極論すれば、エセ中産階級の虚飾に満ちた親の自己満足のための犠牲になっている子ども達の姿だけがうかんでくる。高度成長経済は、子どものスクールビジネスの開花を可能にした。親は、子どものためとあらば、何をも犠牲にすることをいとわない。

特に、母親の志向が、そこへいつている。それを、社会的経験の豊富な父親が、権威を持って止め、本来の子どものもつ自発性ややる気に援軍を出してやらないのだから、何をかいわんやである。親と子の犠牲の図式がここに成立し、遠からず、破たんがやってくることは間違いない。

個人の家庭で、破たんがやってきて、子どもが、けいご事を拒否するとか、塾へいくことをやめるのは、たいした問題にはならない。これが、こうじて登校拒否になってくると、一家庭の問題だけではなくてくる。問題は一段と深刻になってくるわけである。

こうした問題も、たしかに大きい問題である。しかし、私は、幼児時代から欲求不満のかたまりのような精神構造をもった子ども達が、これから成長して、成人に達し、中高年に

なっていた遠い行末のことが気がかりでならない。現在の中高年とは、もちろん人間類型において、異人種と呼んでいい人々が社会を構成するようになる。

しかも、社会は、コンピュータの支配する脱工業社会である。自由時間の増大は、その極に達し、人間は、それら空白の時間を有効に活用することができるだろうか。怠惰と退屈の真中で、文化は、どうなっていくのか心配でならない。

3、大切な自然とのふれあい

現代の幼児の世界を、私は、少々、ペンシスティックに描き過ぎているのだろうか。多くの大人達の余暇を、みてみると、なぜ、日々の気ばらしにしか、それを活用できないのかと思う。そして、その答えは、子ども時代における創造的余暇の価値について正しい認識を植えつけさせる以外に方法がないと思う。余暇教育は子どもの時代にこそ力を入れなければならないと強調したい。

本年三月、私のこうした主張は、幸いなことに、東京新聞の「この人」とNHK「朝のロータリ」に取りあげられることになった。そこで、一つの提案として、親も教師も、だまされたと思ってやってみてくださいと次のように語った。

「子どもの世界から自然や遊びが奪われて、人間形成がゆがめられているのです。この文明病から子どもを回復させるには自然の中にほうり込んでやることが重要です。」

さしずめ、夏休みが、最も適しているのであるから、野外活動の体験を一人でも多くの子ども達に味わってもらいたい。たとえ、二泊三日のプログラムでも、たえて久しい子ども達の「目ののがやき」の違いに注目させられることは間違いない。

子ども達から生き生きとした表情と、喜びをかみしめている顔というものは、近年、お目にかかることが少くなっているようである。日常生活圏での活動も、大切であるが、一年のうちに教回は、自然との接触を通じて、日常性から脱却しないことには、荒廃した子ども達の心は、本来の人間性にもとらないのではないだろうか。

私は、かつて、H・T・ペイリーを引用して、自然に親しむことの少い子供は大人になっても、自然、書物、小説、歴史、詩、絵、音楽などのほんとうの良さを味わうことができない、と書いた。(拙著『余暇教育の設計』文和書房 昭和五二年) 子どもと自然とのかかわりを説いた現代への警鐘の一つと

して重要であると思う。

ペーリーのいう自然という概念を、私は、「ほんもの」と理解している。子ども時代ほど、「ほんもの」にふれさせ、「ほんもの」を見せなければならぬ時期はない。現代は、清水幾太郎氏もいう如く、余りにもコピーのはん乱した社会である。けいこ事、塾の多くの部分、テレビ、雑誌、絵本、レコード、等々、コピーが満ちあふれている。

人間、まして、幼児は、コピーでは、感動し、深く心を動かされることは少い。しかし、人間形成にとって最も大切なことは、私は感動だと思う。自然の世界には、コピーにもせものも存在しない。あるのは、すべて、「ほんもの」だけである。

夏休みこそは、子ども達を、虚飾のない「ほんもの」の大自然の中で過してもらいたい。自然という最大の教師から多くのことを学んで欲しい。そのために、先生方親達が協力して、その体制をつくって欲しいと思う。

(勸日本余暇文化振興会)

子どもキャンプでのふれあい



藤崎真知代

人間は誰しも他者とかかわりあって生活し、その過程において相互に影響を及ぼしあいながら発達していく。おとなと子どもとの関係においても同様であり、ともに自己の成長を目指す上でいく存在同志であり、個人個人が全人間的に示すあり方が問われるといえよう。

このような観点に立って、われわれおとなが子どもにとってもつ意味と、人間関係のあり方を体験を通して明らかにしていくために、おとなと子どもとの共同の生活の場 Human Relationship Laboratory (通称H・R・L、ないしは子どもキャンプと呼ばれる)を、毎年夏休みにもつということ

が、古沢頼雄氏を中心に行なわれてきている。

そこでは、準備過程として、毎年子どもキャンプ前に、おとな達が二回の合宿や月一回の例会において相互にかかわりあいながら、自己のあり方を考えあう機会をもち、そこから、子どもにかかわる基本的態度についてある程度の共通の理解(意識)を為しうるように努力している。それは、「子どもがおとなを必要としている時に、そのことを敏感に感じとり、十分に受けとめ、その子どもの必要に応じて対応する」ということであると、私自身は理解している。そして、具体的な子どもとのふれあいの中で、どういう場面で、どう

対応するかは、それぞれのおとなに任されているだけに、
「その時、どうしてそのように行動したのか」について、繰
り返し自分自身に問いなおすことを通して、「自分を見つめ
る」ことが余儀なくされるといえる。

このような準備過程と平行して、二・三度子ども達とふれあ
う機会（子どもグループと呼んでいる）をもった後に、夏休
みの四―五泊以上の子どもキャンプを迎えるのである。

参加する子どもは、昭和四十年九月から四十一年二月にお
たつて、東京・母子愛育会愛育病院で第一子として生まれ、
追跡研究の協力家族となっている人達の中から、この企画に
応募したもので、年によって構成員には多少の変動があるに
しても、ほぼ二十五名前後である。一方、かかわるおとな
は、日常的な例会、および子どもグループのかかわり手とし
て参加しているおとな他に、子どもキャンプを中心に参加
するおとな、および医師を含めて二十名前後で、総勢四十―
五十名となる。

子どもが六歳の時から始めたこのキャンプは、キャンプ地
を軽井沢、岩井と経て、翌年（昭和四十七年）に群馬県の中
里村、長寿園という一つの村、一つの施設に出会って以来、
昨年までの七年間、そこで行なわれてきている。私自身は、

第二回中里キャンプ、すなわち子どもが九歳のときから、ひ
とりのかかわるおとなとして参加しつづけているのである。

ところで、このキャンプを通して子どもが体験する基本的
なことは、一日を過すにあたって、子どもの気持とは無関係に
決められた予定に自分自身をあてはめるのではなく、個々の
子どもが、その時々自分の気持にそって、自分で一日を作
り出していくことである。たとえば、起床時間、食事時間、
就寝時間について、だいたいのところは決まっているけれど
も、早く起きて、朝食前にひとしきり自分のやりたいことを
する子どももいれば、遅くまで寝ていて朝食を食べそこねて
しまう子どももあり、また何人かで徹夜をしようと、夜遅く
までがんばっている子どももいる。いずれにしても、子ども
自身が自分の行動を決め、その結果体験する様々なことを、
自分の責任の中で受けとめながら、自然と出会い、子どもと
出会い、おとなと出会っていくことであるともいえよう。

そうした基本的なあり方を大事にしながら、子どもがやり
たいということ（たとえば川遊び、ハイキング、化石取り
等）については、子どもの意向がなるべく実現されるように
おとなが援助する。一方、おとなの側から、「こんなことも
できるよ」といったことを子どもに知らせ、子どもとおとな

が一緒になって企画を進めていくものもある。

このような毎日の企画に対して、参加する、しないは、もちろん子どもの意志に任されており、キャンプ期間中、宿舎から外には一歩もでない子どももいたりする。そして、そうした一日一日の子どもの行動や、気持の動きなどについて、夜、おとなの間で話し合い、それぞれの子どもにとって、このキャンプ生活での、その日のもつ意味について、時間と体力の許す限り吟味し、翌日の子どもとのふれあいに、そのことを、おとなそれぞれの受けとめ方で含んでいくのである。

たとえば、キャンプ前の子どもグループの時から、すでに“この夏は釣をやるう”と決め、色々な釣道具を持ってきて、毎日川での釣を楽しみ、釣大会を企画して、着々と自分のやりたいことを実現している男の子もいる。そんな彼にとって、おとなは、かたわらにただで十分であろう。また、その年のキャンプが終るとすぐに翌年のキャンプで演じる劇を考え始め、シナリオをほぼ一年近くあたたためてきた女の子もいる。彼女は宿舎に到着するとすぐに、その準備にとりかかり、子どもとおとなを含めて配役を誰にするか、練習時間をいつにするか……などあれこれと思い悩む。そして、劇を演ずるまでにまだ日数がある時は、他の企画に参加して

練習に出られない子どもやおとながいても、彼女なりに受けとめることができるのだが、いよいよ明日、今晚と迫ってくると、彼女の劇を成功させたいという気持の高まりと、なんとなく劇に参加している子どもの気持と、彼女に頼まれて断わりきれずに一つの役をどうにか演じようとしているひとりのおとなの気持との間には微妙なずれが生じることになる。すると彼女は苛立ち、塞ぎこんでしまうのだが、その時に彼女の気持をくみとり、“劇に参加している子どもやおとなにも、彼女が劇をやりたいと思うのと同じように、やりたいことが他にある”ということが受け入れられるように、しかも、そうした過程をすべてひっくり返して、“劇をやった”という体験につながるようになることが、かたわらにいうおとなの配慮といえる。

子どもの年齢が小さい時には、おとなの配慮は身の囲りの生活の世話や、家族と離れていることの不安に対して主に向けられていた。が、子どもが成長するにつれて、そういう意味での配慮はほとんどする必要がなくなっている一方、それぞれの子どもが背負っている状況を十分にくみとった上で、少くとも、“このキャンプに参加してよかった”という気持を抱いて帰ることができるように配慮することが、

一層大切になってきていると思われる。

第一回目のキャンプが企画された時に子どもを参加させたお母さん方の当時の感想の中に、「いわゆるキャンプというイメージから、規則正しい生活を身につけて帰ってくるものと期待していたのが、どうもそのようなキャンプではないらしく、とまどっている」といったものがある。これを読んだで、第一回目も、それから十年経った今も、キャンプ生活の基本的あり方には変りがないのだな」という感想を持つと同時に、こうした基本的なところを、今後も大事にしてゆきたいと思うのである。

キャンプを終えて引き上げる時には、色々と片づけるべき仕事が増える。子どもは、小さい時には、その間、外で遊んでいたのだが、二三年前から、自然と参加するようになってきた。自分のやりたい仕事を選び、おとなと一緒に作業をすることを通して、一つのふれあいの場となりつつあると同時に、キャンプ生活を営む上で必要な仕事の一つに子どもが参加し始めたといえる。こうした変化を捉えながらも、さらに子ども自身の中に、積極的にキャンプでの仕事に参加したいという意向が育まれるまで待つことが、いわゆる人間生活を支えている仕事を内的に受け入れていく過程で意味をも

つてくると思われる。

この夏のキャンプは、キャンプ地を七年ぶりに、中里から西湖に移して、どのようなものになるのであろうか。思春期を迎えた子ども達と向いあうことのむずかしさ、大事さ、そして楽しさを感じながら、ますます自分自身のあり方が問われる子どもキャンプであると痛感するこのころである。





村石京子

図書紹介に何がよいかしらと頭をなやませながら、結局、最近手にした本を三冊程あげさせていただくことになりました。

その一、親は子に何を教えるべきか

外山滋比古（P H P 研究所刊）

この本は、五四年四月に刊行されたもので、「これから「家庭教育法」という副題がついております。四月に入って間もない日、手元に送っていただきました。

外山先生は御存知の方も多いと思いますが、お茶の水女子大の教授で英文学が専攻でいらっしゃいます。そしてその豊かな人間味と広い識見とをもって、言語の問題などを中心として幅広く教育界で活躍しておられます。時折講演などをうかがうと、思いきった発想による歯切れのよい話

し方や、ウィットに富んだ表現に、時の経つのも忘れるとはこのことでしょうか、いつも楽しくひきこまれていくのでした。そして勿論、面白いという魅力だけでなく、心の中に、いつもはありきたりで平凡に見えていたものが何か活き活きと新鮮に見えてくる手がかりみたいなものを教えられるのです。今まで何ということなく話していたおとぎ話や言葉づかひも、先生に分析されると新しい印象で生まれかわるのです。それなら他のことにしても、もっと別の角度で物を見たり考えたりすれば、もっと違った意味合いや発見も出来るのではないかなといった考え方の基になる意欲みいたいなものを与えられる感じが残るのでした。

この本も外山先生の声がそのまま文章になったように、切れのよい言いまわしで現在の学校教育や家庭でのしつけなどに鋭いメスを入れています。最近、教育界などで

も他から批判をおそれるのか、何か自分のしていることに自信がないのか、やんわりと角のない円滑な言いまわしや、独自性のない表現が多くなっています。教育の世界にも戦後民主主義は徹底し、全体的に見て全ての面で向上しているというのに、何か今の教育に欠けているところがあって、それでは素晴らしい人間を生み出すことは出来ないといった歯がゆさがどこかにあるのです。それをいつもいらいらと外側からばかり手さぐりで感じているのですが、その核を小気味よく、遠慮なくついであります。大人は教師でも親でも他の人と同じことをしていることで安心したり、同じ流れに乗ることです正しいと思ったりするのでしょうか。教師は親や他の教師の非難をおそれる自己防衛の本能のようなものが浸透し、親は家庭でのしつけをなおざりにして家庭で行なわなければならない部分まで学校に依存し、学校は社会の求めに応じるあまり教育の何かを忘れてまで、役に立つ人間育成という教育実利主義の思想に走るといった傾向があります。新しいことにしても、たまたま誰かが考えてそれが良いとされると、今度は今まで大切にしていたものでさえ惜しげもなく古いの一言でふり捨て、我れも我れもと新しい流れに追随していくのです。自

分自身で物を考える力が稀薄になっているとおうか、自分の行動に自信がないとおうか、とにかく基本がしっかりしていないから他に合わせることに多く心を向けているのが現在の世間一般の風潮のようです。他と協調しあっているのも勿論必要と思いますが、母親にしても教師にしても自分のしていることに信念がもてないなら、どうして良い子どもを育てることが出来るでしょうか。先ず自分自身が背筋をしゃんとして毅然とした態度をとることが出来ないと、人間教育は歪められてしまうと改めて思うのです。それから母と子のふれあいの大切さを、「母乳語」という言いまわしで書かれてありますが、これは言い得て妙と思います。この世に生をうけた瞬間からはじまる人間教育の出だしの一步をたくされた母親教師に、その責任の重大さを考えさせてくれることでしょうか。この本の中には、時折逆説的な表現や反養生訓に近いような見方も出て来ますが、肝要なところはびしっと釘を打ってあります。短い一行の中に何頁にもまさる大きな一言も出て来ます。本のタイトルは、「親は子に何を教えるべきか」とありますが、安直な答を求めて頁をくつても、そこには回答は出てこないでしょう。自分で何かを読みとったら、次は自分の力で

何かを考えたり、何かをしようとしなければならぬので
す。一冊の本から簡単に答を見つつけようなどと安易な気持
では、自分の歩む道や自分の信念は持ちえないでしょう。
そのような意味で、母親も教師も読んで良い刺激を得ると
思います。

その二、兎の眼

灰谷健次郎（理論社刊）

この長編小説は、今年の一月には既に第七刷が出されて
おりロングセラーにあげられているので、読まれた方も多
いと思いますが、もしまだの方があつたら是非読んでごら
んなさいと推めたい、そんな気持でとりあげました。全編
を貫く作者の人間愛の心は読む者の胸に迫ってくるものが
多く、時折読み続けるのがつらくなる程でした。

多くの教師は自分の置かれている範囲の中で、人との出
会いにおいてこの本の作者と多少とも似たような経験をし
ているといいますが、現在の私には経験の中があまりにも
狭すぎて、体験的には共通するものにはめぐりあつていな
いのが事実です。けれど子どもを心からいとおしいと思う
気持の中には、自ら通じあうものがあります。新任の小谷

先生が、自分に心を開いてくれない鉄三に対して何とかし
て心を通じあわせたいと願つてやまない姿や、要養護児の
みな子ちゃんの世話をすることによって級の子ども中に芽
生えていった優しいわりの思いなどというものが、ま
るで現実の身近の出来事のように、私の中にじかに伝わっ
てくるのでした。

こんなにも心あたたかく、優しく、そして勇氣と愛がど
こかの小学校の中に育っている、何かを教える学校ではな
く、人間を大切に育てる教育が行なわれている、そ
う思ったとき自分もそれにゆかりある世界に身を置いて、
子どもと生活することの出来る幸せを思いました。この本
は私に、ともすれば惰性に流されがちであった日々をふり
かえり、改めて素直な気持で子どもと接することの出来る
泉のようなうるおいと優しさを与えてくれるのでした。

ただ、読み終わった後の感想としては「兎の眼」がこれだ
終ったとは思えないのです。もっともずっと続きが読みた
い、教育に終りはないと言いますが、多分作者の体験を通
してえがかれたであろうこの小説の中で、子ども達と先生
が、これから先どんな経験をしながらどんなに育っていく
かをもっと知りたいと思うのです。そして読む者に、日頃

は忘れかけていたひたむきさを直に伝えてくれるあの感動を今一度求めたい、そのためにも是非「続・兎の眼」を書いてほしいと願う気持ちがおきてきて仕方ありませんでした。

その三、旅の絵本

I、II

安野光雅（福音館書店刊）

この絵本には文字が一字もありません。絵本とは文字と絵から出来ていて、絵を見て字を読むものと思っている人は、この絵本はどうやって読んだらよいのでしょうか。パラパラとめくってみても、小さな絵が全部の頁に細かくえがかれているばかりです。

でも、旅をしたい人、心の旅に出かけたい方はもう一回、この小さな昔風の旅人と一緒にゆっくり頁をめくって見て下さい。まだ、車も鉄道もなかった時代です。ゆっくり歩きましょ。あ、何か知っている道を通りましたか。ずっと以前、子どもの頃にどこかで見たことのあるところでしょうか。学生時代にならった歴史の道でしょうか。それとも、一度行って見たいと夢見ていた遠い外国の街並でしょうか。

どこまでも続く美しい道を時には迷いながら、時間をかけて歩いていく、何と楽しいことでしょうか。安らぎとなつかしい思い出と、そして思いがけない発見と、文字は一字もないけれど、絵は実に多くのものを語りかけてくれます。見る人によって、読みとるものはみんな異なるでしょう。貴方もどうぞ頁をめくってみて下さい。何回も同じ道を通ってみるのも、きつとよいでしょうね。貴方はどんな旅が出来るのでしょうか。

私は家の子ども（大学生と高校生）にこの絵本を見せました。二人ともはじめは「何だこれは」といった顔で見えていましたが、やがて「アッ」と言ったり、ニヤッと笑ったり……。読後感「ああ、面白かった」そして二度も三度も自分の旅したところをふりかえって楽しんでいるので。この絵本は五歳からとなっていますので、今度は私のクラス（年長）でその反応を見たいと今思っています。はたして子どもたちはこの絵本に興味を示すでしょうか。早くその結果が知りたくて、楽しみでわくわくしています。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

「自伝」の読書について

—— 福沢と河上の場合 ——



森田 明

一般に自伝を書くのがうまいと目されているのはイギリス人である。スチュアート・ミル『自伝』から『チャーチル回顧録』までのイギリス自伝文学には最先進近代国家としてのイギリス人の自己意識には一人の人間の生涯をたんに自らの個人的な回想というよりはむしろある時代と社会のドキュメントとして、つまるところ客観資料の形で投錨しておこうという感慨がみられる。日本の近代史にも古典に近い意義をもった自伝がなくはない。しかし一般的に言えば日本の場合、自伝文学という独立のジャンルが伝統として成立せず、むしろ滔々として流れる私小説文学の一分岐を形成した。この現象は「私小説」という日本特有の文学形式を生み出すに至った思想的条件が何だったのかを問題にする際必ず出てくる

主題の一角をなしている。

ところで自伝の読み方は決して文学や思想史の観点からばかり問題とされるものではない。一方で語り手を生みおとした歴史的背景と、他方でその歴史的条件と対話した個人の自由の問題が交錯し合うところに自伝の面白さがある。たとえば文体自体一九世紀中葉イギリス知識人をしばりつけていた所謂ヴィクトリアンイングリッシュで書かれているミル『自伝』は、スコットランド出身の苦学生であった父ジェームス・ミルの社会的出自が、当時のイギリス社会で一人の知識人を生み出すのにはいかに大きな困難と犠牲を強いたかを物語っている。しかしミル自伝のもうひとつの面白さは、ミルは死を覚悟するたびになぜかくも悲愴な努力で自分の自伝を

五回も書き直したのか、という人間ミルへの興味を讀者にそそるところにある。ミルの幼少時からとことんミルを英才・天才に仕立て上げようとした父ジュームス・ミルの執念のありかの問題、父の執念の下で育ったミルの危機がハリエットという人妻との一〇数年間の恋でやっと保たれ得たこと、自伝の中に母を語る部分の一つとして出てこないこと（何回目かの草稿でミルはこの部分を全て削ったらしい）等々、ミル自伝は一種成育史的ミステリーに満ちていて、島崎藤村のように何でもかんでもぶちまけるスタイルになっていないところがミル研究者を引きつけているひとつのゆえんだらう。

社会的・歴史的条件との対話という観点から日本近代の自伝を考えてみた場合比較して面白いのは福沢諭吉『福翁自伝』と河上肇『自叙伝』である。前者の舞台が幕末から明治国家体制成立前期までの第一の動乱期であるのに対して、後者はほぼ制度化を完了した国家体制と日本資本主義の勃興によって生じた第二の動乱期（大正デモクラシーから日本ファシズムまで）を舞台にしており、比べて読み通すだけで行間から時代の空気の違いといったものが鮮明に伝わってくる。

このような思想的観点からする福沢・河上研究は膨大な量にのぼる。ここでは二つの自伝をむしろ人間福沢・河上の根

底にあった世界感覚（宗教意識）に着眼して紹介し、両者の面白さのありかについて少し考えてみたい。

『福翁自伝』を貫いて特徴的な福沢の精神は「笑い」である。これに対して『自叙伝』のそれは「求道」である。

福沢は譜代小藩中津の下級士族の生れで、その点で明治の群雄がおおむね幕藩体制下で冷飯を食わされた譜代藩の下級武士の出であったのと出自を同じくしているが、当の福沢には不思議と当時の志士が共有していた経世への熱が少ない。

「私のために門閥制度は親の敵でござる」というのは幼少時を語る福沢の名言の一つに数えられているが、彼の一生は「父の生涯……空しく不平を呑んで世を去りたるこそ遺憾なれ」の線上に予想され得た「意趣返し」とは遂に相交わることがなかった。幼い頃兄に先々何になると問われて、「日本一の大金持になって思うさま金を使って見よう」と答え不興を買った末反問したところ兄の方は「真面目に『死に至るまで孝悌忠信』と唯一言で私は『へーい』と言った切りままになつた」福沢の精神には、当初より大義名分的なものをもととんつつ放して笑いとぼす心情が宿っていたように見える。福沢のこの特徴を示す庄巻は徳川慶喜が江戸へ逃げかえった時の江戸城中の描写に著しい。「サア大変、朝野共に物論沸騰

して、武家は勿論、長袖の学者も医者も坊主も皆政治論に忙しく、酔えるが如く狂するが如く、人が人の顔を見ればただその話ばかり」といった状態の中で福沢は加藤弘之と会う。

慶喜に会うべくか、みしもを着て今後の天下の経綸を諫することと頭に血がのぼっている加藤に、戦争が始まるなら逃げる準備をしたいからどうなるか教えてくれときいて「眼を丸く」され、「僕は命掛けた。君達は戦ふとも和睦しようとも勝手にしなさい、僕は始まると即刻逃げて行くのだから。」とふっかけて「プリプリ怒」られるくだりには福沢一流のユーモアが流れる。後に明治政府の気鋭の論客に転進し、かつそこでも自然法論からソーシャルダーウィニズムへと三段とびの転向を続けた加藤への皮肉が暗にここには込められている。加藤弘之の一生が短い波長の状況に埋没することによって鋭い状況適応能力をとぎすますのに向けられたのに対して、福沢のそれは時間的空間的諸条件を一旦つき離すところから生まれるところの「統一的世界像に向う開放的態度」（藤田省三）の下での転向能力と不動の方向性との結合から成立していた。福沢の一生を貫くこの種の笑いは、彼の行動をし、けの時には積み荷を捨てて舟足を早くする大型の帆船のようなものにした。

これにくらべると河上肇の一生はレールをくり返し引き直してはひたすら走り続けた小型の蒸気機関車を思わせる。

たどりつきふりかへりみれば山川を

越えては越えて来つものかな

河上が昭和七年正式に日本共産黨員になった折にこの句をものして我身を詠った時、すでに河上は五三才であった。河上の遍歴は二六才の時東大講師を放り出して無我苑なる宗教運動に飛び込み、それを棄て、やがて京大にもどり『貧乏物語』『経済学大綱』に結晶するマルクス主義者、大正デモクラシー下に開花した京大社会科学の先駆者の位置を経てふたたび昭和八年以後の地下運動へ入って行くというジグザグの行路をたどった。この間の河上の行路には常に悲愴さに満ちた求道心がただよっている。河上は『貧乏物語』の序文に「自分では之が今日迄の最上の著作だと思ふ」と書くが、弟子の榎田民蔵に「禪話道話に書中に満つ」と批判されマルキシズム理論として欠陥があると自認するや直ちにこれを絶版にしてしまう。「私という人間は、良心に疚しさを感ずると非常に弱くなるが、苟しくも信念をもって立ち上った以上、容易に他人に負ける男ではない」、「自分のような明治十年代に旧士族の家庭に生まれ、ずっと明治政府の教育を受けて来

たものが、現在の状勢下に於て斯かる境地に達するまでには如何に多くの苦勞を嘗め来たかを回顧せざるを得なかつた」、という先の入党時の自己認識は河上の一生を貫く通奏底音として、その都度の不器用な曲り角各に現われてくる。

昭和八年わずか一四〇日間の地下生活の後、元勅任官京都帝大教授河上肇は治安維持法違反で検挙され三年九か月の獄中生活を送ることになるが、獄中での河上の思想的意味での非転向を支えたのも又彼の天性の宗教的抽象能力と求道性にあった。彼は言う、「かりにも三十年の水火をくぐつて来た私の学問上の信念が、僅か半ケ年の牢獄生活によって早くも動搖を始めるという事は在り得ない」、信念(信仰)を物理的権力から超越させておきた河上のエネルギーは「宗教にあつては、科学と違って九年面壁がその本領であり、真理把握の方法である」という地点に立った「宗教(仏教)とマルクス主義」(獄中論文)を結晶させた。ノミナリズムと批判哲学の洗礼をほとんど受けることなしに学問の道を歩いた河上の精神(当然にもそこでは認識の実体化傾向が強烈である)の中に最後の地点で認識価値の自立性の確信を生み落し、もつて土俵際で彼の思想と学問を政治権力から守つたものは、逆説的にも彼の学問と切り結ぶ形で獲得された「九年

面壁」という河上一流の宗教価値の自立性であった。これは一つのアイロニーである。

福沢と河上の間にある四五年度の世代差と社会変動、パーソナルな資質の要素を別論とすれば、この両極端に位置する精神は我国の近代思想史を貫流する二本の縦糸をかたちづけている。そして明治一〇〇年余を経た日本社会の思想的体質の主流は、一般に考えられているのとは逆に、むしろ河上型のそれがキバを抜かれ俗流化したところに結実した。過剰の真摯さとその陥穽に対する福沢の暗黙の批判は、今日の社会にあつてなお完全な市民権を得るに至っていない。

自伝を読むことの意味を、福沢の「笑い」と河上の「求道」との対比から考えてみたかった。ここには、果して両者は真実相交わることのない糸なのかという問が大きく浮び上る。右の問に答える為には福沢の笑いの背後に隠されていた一種の無常感と河上の熾烈な日本神秘主義的傾向との対照を探ってみる必要があるようだ。だがこれはもう自伝読書の土俵を超えるテーマに属する。

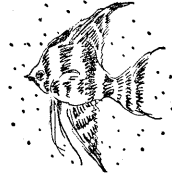
(お茶の水女子大学)

J・S・ミル『自伝』

福沢諭吉『福翁自伝』

河上肇『自叙伝』

いずれも岩波文庫で入手可能



本田 和子

「メルヘンと女性心理」

M・L・フォン・フランツ著 秋山さと子、野村美紀子訳

(海鳴社、1979・1月)

「女らしさ」とは、女性にのみかかる特性ではない。姿態や粧いのそれを超えて、人に「内在する女性的なもの」、それは、肉体的な性にかかわらず、男性にも潜む人間性の重要な側面なのだ。「女らしさ」の解明が、人間理解に連ることは言うまでもない。

これら「内なる異性」に光を当てて、人格の全体的把握を試みようとするのが、ユング心理学の立場である。この

本の著者、M・L・フォン・フランツ女史もまた、ユングの高弟の一人であり、メルヘン解釈の第一人者とされている。訳者の「あとがき」によれば、博学多識の才女で、ユングに娘のように愛されていたと言う。みずからも女性であり、外形的にも「小柄で色白な」女らしい容姿の持ち主であった著者が、衆に抜きん出た知力を駆使した「女性心理」の解明といえは、それだけで、充分に魅力的である。しかも、それが、私どもにも身近な昔話の数々を、分析・解説するという興味深い作業を通じて、進められていくのだ。

昔話を、人間の普遍的無意識の現われと見て、物語を手

がかりに、心の深層に迫ろうとする試みは、最近、幾つかの優れた著作によって、私どもにも親しいものになってこようとしている。河合隼雄氏の『昔話の深層』^{*}や、B・ベッテルハイム氏の『昔話の魔力』^{*}がそれである。本書は、それらと重なり合う部分を持ちながらも、但し、「女性性」に焦点が当てられているため、物語の解説が若干異なる場合も少なくない。これは、訳者も付記するように、昔話のように豊かな素材は、「なにを目的とし、どこに重点をおくかによって見方が異なる」ということであろう。

従って、本書は、「女性的なもの」の機微に迫るスリリングな面白さを堪能させてくれると共に、昔話の多彩な魅力に、改めて瞳目する機会を提供してくれる。私どもの身近にあるものが、人間を理解するためのこんなにも素晴らしい鍵となり得るのである。



具体例に言及しよう。グリム童話に「ユキとバラ」という物語がある。ユキとバラと呼ばれる二人の少女が、母親と平和に暮している。ある日、凍えかけた熊を助け、以

後、一緒に暮し始める。少女たちは、森で、木の割れ目にひげをからませて困っている小人の老人を救けるが、小人は感謝するどころか、ひげを切られたことに文句をつけて二人を罵り、次々と勝手な要求を出す。気のよい少女たちは、年老いた小人に同情し、懸命にその要求を叶えようとするが、小人の恩知らずぶりは、際限もない。そこに、例の熊が出てきて、一撃のもとに小人を打ち倒した。熊は、呪いが解けて王子に戻り、ユキと結婚し、バラも王子の弟と結婚して、末長く幸せに暮した。

さて、この物語が、「女性心理」のどのような側面を明らかにかにし、女性原理と男性原理の関係を、いかように説明するのだろうか。

物語の冒頭部は、先ず、無垢の幼年時代のバラダイスを物語る。母を中心として、バラの花に囲まれた穏かな生活、然し、父親不在のひたすらに女性的な世界である。やがて、「熊の到来」という形で、男性原理が出現した。凍えかけた体を介抱され、少女たちの遊び相手になるなど、熊は善良で優しい動物だが、行動すべき時が来ると小人を一撃で打ち倒すほどの力を発揮する。少女たちが過度の女性性のゆえにセンチメンタルな同情に溺れかけていると

き、熊は一瞬のうちにそれを断ち切るのだ。

これは、女性にとって極めて示唆に富んだ物語ではないだろうか。女性の一面的世界は、男性との関係、或いは、自己の「内なる男性性」、つまりユングがアニムスと名付けたものによって補われることで、全体性を獲得し得るのである。女性が余りにも女らしすぎて、アニムスの力が弱いと、生は、彼女を圧殺しかねない。

ところで、この物語の場合、小人もまた、内なるアニムスの一つの姿と見られる。不機嫌で怒りっぽく、絶えずトランプを起こす厄介な存在。これは、アニムスの破壊力がマイナスの現われを見せた場合の典型であり、しかも、何事にも「イエス」としか言わない過剰な女性性への補償なのだ。振子が一方へ振れすぎたなら、当然、反対の極に揺れもどる必要があるからである。

物語の終りに、小人は死んで、代りに、熊の弟が突然出現し、バラと結婚する。弟は、小人の「転身」と考えてよいだろう。つまり、はじめは「熊と小人」という二つの男性性があったのだが、小人は、熊という健康な男性原理に転身し、少女は、結婚という形で統合を成し遂げたのであった。二人の少女と二人の男性の作り上げた四人一組、

「四」という数字は、ユングによれば、精神の全体性を象徴する。物語は、女性の人格が、完全な成長点に到達する姿を示しているのだ。



ユング派の昔話研究の特色の一つは、それが、絶えず豊富な臨床例との関連で読み解かれるということ、逆から言えば、症例の複雑な心の問題を洞察するために、昔話に象徴された事象が巧みに活用される、ということであろう。例えば、この物語に関しても、著者は、不遇な青年に同情を注ぎすぎた余りに、自身の生命を危うくされた老嬢のケースなどを引用している。私どもは、それらの実例を通して、哀れにも無駄使いされていく「女らしさ」を垣間見せられ、戦慄を感じざるを得ない。

一方で、ユング派の分析家たち、とりわけ本書の著者は、昔話の解釈に当って該博な古典の教養を駆使し、人間の文化に対する透徹した視力を発揮する。例えば、この物語の熊が示した「憤怒」をめぐる、キリスト教文化圏での「聖なる怒り」の問題が検討されるのだ。

小人の「ひげ」のような個々の象徴の解釈に関しても、その背景となる文化的素養の豊かさは瞠目に値いしよう。また、小人のひげを読み解く過程で、「妻殺しの青ひげ」や「つぐみひげの王さま」、或いは「オル・リンクランク」など、他の昔話の「ひげ」にも言及されていて、私どもが新しい昔話に出会ったときの楽しみを、倍加させてくれる。

結果として、私どもは、次のようなことに気付かされるのではないか。すなわち、人間の心の問題は、単に「心理学という専門領域」にのみ閉じこめらるべきことがらではない。それは、宗教や芸術は言うまでもなく、人間の生み出したあらゆる叡智を活用して、多方向からのアプローチを必要とするものなのである。



本書では、上記の例以外に六篇の昔話が解説されている。因みに、訳者の一人秋山さと子氏は、ユング研究所で学んだ研究者である。

女性による「女性心理洞察の書」が、二人の女性の手で

訳出されたことは、二重の意味で興味深い出来事と言えよう。

* 1 河合隼雄「昔話の深層」福音館書店、1976

* 2 B・ベッテルハイム、波多野他訳「昔話の魔力」評

論社、1978

「はるにれ」

(こどものとも、274号 福音館書店、1979・1

月)

十勝の草原に、枝を広げた一本の「はるにれ」。カメラは、ひたすらにその木をめぐる、枝の囁きと、光と風の動きを、無言の映像に託そうとする。

金茶色に輝く秋の草原の「はるにれ」。薄くたなびく巻雲に僅かの明かるさを残しながら、暮れていく原野の「はるにれ」。

そして、十勝に冬がやってくる。

極寒の雪原の黎明は、青一色の無言の世界。「はるにれ」も、また、ひとときわ深く青い陰として、その静謐になろう。雪の地平が淡い金に染まって、薄墨の雪原に光のしまが流れ、やがて空をうつして雪の面も青く澄みわたるとき、枝々は、一斉に透명한白さに凝結し、輝きの音をたてる。

ゆつくりと冬が遠のく。すべてがおぼろにかすむとき、「はるにれ」も、空の中にその輪廓を溶かそうとするが、然し、深い夜の闇が訪れると、その立ち姿は一きわ黒々と動かない。枝々は沈黙し、永劫の天地の支え手となる。

そして、草原に若緑の風が吹く。見えかくれする黄色の、白の、野の花たち。

「はるにれ」は、いま、梢に葉をひるがえし、颯々と渡る大気と共に、生命の讃歌を歌っている。

一ことの言葉も文字もないこの絵本が、私どものものに耳に響かせるもの、それは、限りなく明澄でしかも豊饒な、宇宙と人生の歌である。この映像の力の前に、人は、語るべき言葉を持たない。

ただ沈黙し、くり返し頁を繰り、憧憬し放心する以外にすべのない絵本を、私どもは、また、身近に加えることが出来た。

* *

ルソーの夢

——むすんでひらいて考(その十一)——

海老沢 敏

八、讚美歌としての《ルソーの夢》(承前)

こうして讚美歌となった《ルソーの夢》は英国ならびにアメリカ合衆国で出版された各会派、教派用の讚美歌集に収められ、《グリーンヴィル》、あるいは《ルソー》といった名称とともに、各種の歌詞がつけられて歌われていくが、音楽的に見るといくつかのヴァリアント、異稿が見られるのである。そうした異稿を対照させたものが譜例①である。

最下段の原曲《ルソーの夢》と対比させてみると、第四章

《ルーサウ氏が睡眠中夢に作りたる曲》で紹介したメイスン他編集の《アプライジド・フォース・ミュージック・リーダー》に収録された讚美歌のかたち①が、とりわけ原曲に近いことが理解されよう。附点つき音符の動き、二小節目の三度音程の下降形、第六小節の前半の音の動き、そして最後の小節の動きなどが、そうした近さを明らかに示し、わずかに第六小節後半の三度下降が、同音反復に変えられていて、さらにさかのほって《ルソーの夢》原曲《ルソーの新ロマンス》の当該個所の音の動きを再現している。②の例は、附点音符の動きは、①の三度下降(第二小節後半、②では第四小節)や同音進行(第六小節、②では第十二

▼譜例①

THE ABRIDGED FOURTH NATIONAL MUSIC READER (1898)

11

GREENVILLE SONGS OF CHRISTIAN PRAISE (1882)

12

ROUSSEAU GOLDEN BELLS (GOLDEN HYMNAL) (?)

13

GREENVILLE HYMN AND TUNE BOOK (1871)

14

ROUSSEAU ONE HUNDRED TUNES (?)

15

ROUSSEAU'S DREAM

16

17 a.c.

18 a.c.

19 a.c.

20 a.c.

21 a.c.

22 a.c.

23 a.c.

24 a.c.

小節)に取って代り、かつ第六小節(第十一小節)では逆に附点リズムによる三度の下行進行が同音進行に変えられ、おなじような操作が第八小節(第十五小節)でもおこなわれているというケースである。

③ならびに④の例は、附点音符の動きが、同じ音価の動きに平均化されている点で共通しているが、一方、第二小節、第六小節では三度下降進行と音階的進行のちがいがあり、③のほうが原曲《ルソーの夢》に近いが、この③の最終小節の音の動きはさらにさかのぼって《ルソーの新ロマンス》のそれである。

以上の例はいずれも《ルソーの夢》と同じくへ長調をとっているが、最後の⑤は、ニ長調の調号になり、かつアウフタクトではじまっている点に特徴があるほか、旋律のかたちは《ルソーの夢》の動きに近いものである。

こうした変化を伴ないながらも、讃美歌としての《ルソーの夢》、すなわち多くの場合《グリーンヴィル》と称された旋律は、英米圏を中心に十九世紀から二十世紀にかけて、教会で歌われつづけ、また家庭でも口ずさまれたものであった。その間、一八七〇年代、すなわち明治初年に日本にも渡来したことはいずれ章をあらためて述べることになるだろう。予備的に一言すれば、その日本では、讃美歌としてのこの旋律は、すでにその役割を終えて

しまっている。だが、日本以外の国々ではけっしてそうではない。

たとえばキャサリン・スミス・デイル編の《讃美歌索引》^(注9)(一九六六年)は、合計七十八篇の讃美歌集の内容を収録しているが、十九世紀に刊行された古い讃美歌集から出版年の一九六六年のものにいたるこれらの曲集中、計十六冊が《グリーンヴィル(ルソー)》のメロディーを掲載していることが示されている。その旋律形は《ミー・ミ・レ・ドー・ドー・レー・レー・ミ・レ・ドー》であり、一冊だけが《ミー・ミ・レ・ドー・ドー・レー・レー・ミ・レ・ドー》の形をも収めている。これらの讃美歌集はメソジスト派、ルター福音教会派、ルター・アウクスブルク派、長老教会派(米国)、スコットランド教会、カナダ統一教会、カナダ長老教会、バプティスト(浸礼)派、メソ派、モルモン教派、新教会派、英国バプティスト派と種々の教派に亘り、しかも、第二次大戦前のもは言うにおよばず、戦後のものも少なくないものである。ということは、《グリーンヴィル(ルソー)》が讃美歌の旋律として、現在もおお生命を失っていないことを示しているというべきであろう。

(注9) Katharine Smith Diehl《Hymns and Tunes—an Index》(New York & London, 1966.)

▼譜例②

165 禮拜散時歌 教會：公共禮拜
 LORD, DISMISS US WITH THY BLESSING GREENVILLE
 劉廷芳侯爵與合唱，一九三四 JOHN FAWCETT, 1773 8. 7. 8. 7. D. JEAN J. ROUSSEAU, 1712-1778

1. 禮 拜 散 了 懇 求 祝 福 喜 樂 平 安 滿 我 心
 2. 因 爲 主 的 怨 樂 福 音 我 們 感 謝 歡 欣 榮 榮
 3. 將 來 我 聞 主 愛 呼 聲 聲 我 們 長 離 人 世 時

求 使 各 人 有 主 真 愛 仰 頌 救 恩 常 得 勝
 但 願 主 關 心 的 教 徒 果 實 多 充 滿 我 不 得 心 勝
 生 死 關 頭 主 恩 然 無 懼 懼 然 應 召 我 不 得 心 勝

養 我 精 神 養 我 精 神 經 過 曠 野 路 程
 求 主 能 臨 格 求 主 能 臨 水 同 住 我 治 理 生 無 中 期
 願 主 能 臨 水 遠 願 主 能 臨 水 同 住 我 治 理 生 無 中 期

養 我 精 神 養 我 精 神 經 過 曠 野 遠 生 無 路 活 靈 程 中 阿 們
 求 主 能 臨 水 遠 願 主 能 臨 水 同 住 我 治 理 生 無 路 活 靈 程 中 阿 們

英米のプロテスタント教会を中心に、この《グリーンヴィル》
 が現在なお讚美歌として歌われている事実は、次に紹介する二つ
 の事例からも明らかとなるだろう。
 ひとつは、一九七二年、香港で出版された《普天頌讚》^(注10)なる讚
 美歌集である。この歌集の第一六五番《礼拝散時歌》はジョン・

フォーセット（一七七三年）の讚美歌《かみよみめぐみを われ
 りにぞよぶ》(Lord, dismiss us with Thy blessing)であるが、
 《グリーンヴィル》の表示とともに《ジャン・J・ルソー、一七
 二一—一七七八》と作曲者の指示を与えている（譜例②）。この
 楽譜はへ長調、四分の二拍子で附点つきの動きをもっており、譜

例①の②のかたちであることは明らかであろう。この讚美歌集には、もうひとつ第四二三番〈医務救世歌〉としてゴドフリー・スリング（一八七〇年）の讚美歌〈病める者と死にゆく者は主に向つて (Thou to whom the sick and dying)〉を収められている。

が、これにはヘルソー（聖体拝受）とあり、〈ジャン・ジャック・ルソー一七二二—一七七八〉と記されている（譜例③）。この讚美歌で注目されるのは、ホ長調の調号である。四分の四拍子をとるこの〈ヘルソー〉は、附点の動きをとらぬかたちのもので

▼譜 例③

422

醫務救世歌

特殊：醫院病人

THOU TO WHOM THE SICK AND DYING
ROUSSEAU (COMMUNION)

郭方智譯、一九二九
GODFREY THING, 1870

8. 7. 8. 7. 8. 7.

JEAN JACQUES ROUSSEAU, 1712-1778

【醫院用】

第 165 首調 Greenville 為水調之另一體式：其百律序
8. 7. 8. 7. 8. 7. 號，和聲亦相異。讀者因宜選即可也。

あり、かつヘミー・ミ・レ・ドー・ドー／レー・レー・ミー・ミ・ド
ーの動き、そして中間部のしめくくりの部分でのヘミー・ミ・
ファ・ソー・ソー・ラー・ド・ラ・ソーの動きによって、譜例
①の③と、拍子のちがいはあれ、共通した稿といえよう。この第
四二二番には脚注として「第一六五首調 Greenville 為本調之另
一体式・其音律為八・七・八・七・隻、和声亦相異。読者因宜選
扱可也」とあり、第一六五番の異稿であり、和声処理もまたこと
なっている点を説明している。

(注10) 《普天頌讚(線譜本)》編訂者 聯合聖歌委員会 発行
人、黄 永熙 出版兼発行者 基督教文芸出版社 主曆一九
七二年九月港十一版 (Hymns of Universal Praise. (Music
Edition). Edited by The Union Hymnal Committee. Tenth
Hong Kong Edition, 1972. Chinese Christian Literature
Council.)

この中国系の香港の出版物によって、すくなくとも香港では現
在はなおプロテスタント教会で《グリーンヴィル》が、ルソーの
名を伴って讚美歌として位置づけられ、歌われていることがた
しかめられるのである。

もうひとつの事例を挙げておこう。昭和五十三年(一九七八

年)五月二十二日付の朝日新聞夕刊に掲載された(特派員メモ
は《歌の国籟》と題されたものであるが、その一節を引証してみ
よう。「アンゴラのカトリック教会では《結んで開いて》を聞い
た時もびっくりした。日曜日の祈りのあと、大人も子どもも一心
に歌っている。信徒に「日本の子どもは歌ではないですか」と聞
くと、相手はいぶかしげに「古くからある讚美歌です」と答え
た。」ダルエスサラームの伊藤特派員のこの報告は、彼がこの《グ
リーンヴィル》を「日本の子どもは歌、すなわち《結んで開い
て》として捉えているという興味深い事実を伝えているが、その
点については後章にゆずるとしても、アフリカの地でもこの《グ
リーンヴィル》が教会で歌われているという情報を与えてくれる
点で貴重である。《アンゴラのカトリック教会》とあるのは、あ
るいはプロテスタント教会のあやまりではないかとも推測され
る。いずれにしても、アジアやアフリカでも、この旋律が今なお
讚美歌として歌われつづけていることが明らかとなったことは、
この《ルソーの夢》の世界的な規模での伝播現象の一端をはっき
りとしたかたちで示す点で重要な意味をもっている。こうしたこ
の曲の伝播現象がこの章の対象としての《讚美歌としての《ルソ
ーの夢》》にとどまらないことは、つづく話章でもやがて明らか
にされることだろう。

ここで《グリーンヴィル》につけられた歌詞についても、ごく簡単に触れておくべきであろう。《グリーンヴィル》の原形が、ウォーカーによる《リボン博士の讚美歌集》への姉妹編ではじめて登場する《ルソー夢》の讚美歌への転用であることは本章の最初に述べたが、そのテキストは《讚美歌五六七》あるいは五四一D、R、S、またはコリヤーズ博士六六八（十八世紀）と指示されている。このテキストは《我を導きたまえ、おお、汝偉大なエホバよ（Guide me, O Thou great Jehovah）》とはじめられるもので、一般にウィリアム・ウィリアムズ（一七〇七年—一七八一年）の作といわれている。彼はウェールズのカルヴィン派教会の説教師であった。この讚美歌は英国でひろく歌われるに先立って米国で愛好されたという。このテキストは十九世紀の十年代に《ルソーの夢》と組み合わせられて以来、十九世紀を通じて《グリーンヴィル》のメロディーによって歌われることが多かったのである。

もうひとつ、《グリーンヴィル》にあてられる讚美歌歌詞としては《主よ、汝の御恵みを我らに与えたまえ（Lord, dismiss us with thy blessing）》が著名である。これはすでに名を挙げたことのあるジョン・フォシット（一七三九年—一八一七年）作のもので、この讚美歌が最初に公刊されたのは一七七四年と伝えら

れている。フォシットはヨークシャーのブラドフォドの出身のバプティスト派（はじめメソヂイスト派）の牧師であり、数多くの歌詩を作っており、ひろく歌われたものであった。これら讚美歌のテキストについては、日本の讚美歌としての《グリーンヴィル》を扱う後章で触れることにしたい。なお、外国の讚美歌集では、ほかにもさまざまなテキストがこの《グリーンヴィル》につけられている。

（つづく）
（国立音楽大学）



私の保育

——朝の出会いの中から——



水沼昭子

「せんせい まだ ようちえんやってる？」Yの朝の挨拶。「ええ、まだやってる。大丈夫よ」と答える。時計は午前九時少し過ぎ。子ども達が登園しはじめたばかりである。細く小さいYの肩が忙しく上下して、「ほくネ、ずーっと向うから走って来たんだよ。」と言っているかのようだ。

私にとって大切な時間。それは登園する子ども達を幼稚園の門の前で迎えるひととき。さわやかな日、雨降り、風の日、暑い日、寒い日、さまざまだけれど、私は毎日、門の前で子ども達を迎える。その日、その日で違う、一三六人の子ども達の一三六通りの朝の挨拶を受けとめながら、その日の園生活がその子らしく

過せるようにと願う。

◇ ◇

「せんせい まだ ようちえんやってる？」は、Yの「せんせい、おはよう」である。かけこんできたYの後から母親の、困ったような、でもうれし気な姿が近づいてくる。つい二、三ヶ月前のYは、彼の近所のA子の蔭に小さくなって、私の前を通り過ぎ、母親期待の「おはよう」も言えない子であった。何事にもゆっくりのYは、入園当初から皆のペースに入り込めず戸惑っていた。

テラスを、ほんの少し動くだけでも、大仕事といった感じが伝わってくるほどであった。

Yの、そのままを受けとめながら、しばらくは様子を見た。家庭では、Yのペースを許容できずに、母親は手を出し、口を出す毎日であったらしい。テラスで、ただ立っているだけのY。先生が近づいたり、目が会ったりするだけで、オドオドする。何かしなくとしかられるかと不安気な表情を向けて来た。しかし、「立っているだけでも、先生はおこらないぞ」「ここにいてもいいらしい」「そのような思いが彼にわかってか、少しずつ安定し、テラスから園庭へと動きはじめ、あちこちでYの姿を見ることができるようになった。

友だちの遊ぶ様子を眺めては楽しそうにしている姿がそこにあった。このようになって来た時期、誰の場合も私は心によくよく言い聞かせる。「もう少し待って！もう少しだから。そのまま見守ろう」と。背中を押せば、手を引けば入って行くだろう遊びの輪に、Yが一人で入って行くのを待った。「テンテイ、ナニチテルノ」とYがはじめて友だちの遊びの中に入ろうと近づいて来た日、「よく来たわネノ」と遠来の友を待っていた、そんな気持ちで遊びに加えた。それからしばらくは「Yちゃんは先生のおしり虫」とみんなに言われる位、後からのそのそついで行動する日が続い

た。

だんだん友だちの中にいるYが自然の姿に見えて来た。ところが、ゆっくり動き出したYに、お姉さん気取りのA子がお節介をするようになった。A子はまるで、「幼稚園では私がYちゃんのお姉さん」と言った風で、Yの行動、Yの言葉に一つ一つお節介をやく。Yの今までのもたつきとは違った状況でA子も又、皆の中に入れない子であった。A子にとってYに「お姉さんぶる」事が、彼女自身の園生活を、まずは安定させるようであった。Yのオドオドした行動が再び目につくようになる。A子の「お姉さんぶり」が加わる。この状態を、とにかく、YとA子にとって一つの刺激、ステップにさせたいと願った。内心「Aちゃんお手柔らかに……」とも願った。

やがて、二学期末になってこの関係がくずれれる時が来た。A子が病気で二週間ほど休園したのである。Yは久し振りに、Yのペースで動きまわるだろうと考えていた私に、所在なさそうな態度を見せた。園庭のテーブルに、ポツンと一人でいるYに「Aちゃんいなくて、さびしいネ」と近づいた。「Aちゃん、お熱あるんだってヨ、かわいそうだね」との返事。子ども達の関わりの不思議さを知らされたと同時に「お姉さんA子」を制する事をしなくてよかったと思う。さらに驚く事が起きたのである。久し振りの

登園に大はりきりのA子が、例のごとくYにお姉さんぶりを發揮した。その時、Yは「いやだよ、いま、これがしたいの！」とはっきり拒否したのである。Yの内面で何が変わったのだろう。A子も、まわりにいた子達も先生もびつくりした。その日の記録に「本日、やつとY君本格的入園!？」と書き込んだ。本来Yの持つ力が一度にふき出したような毎日のはじまった。小柄で、多少赤ちゃんな言葉が残り、動きも相変らずゆっくり、A子にも時折、ふりまわされるけれど、Yが全身で「ぼくネ、幼稚園、大好き!」「いっぱい遊ぶんだ」と叫んでいるような気がする。

「せんせい、まだ、ようちえんやってる」「まだ、いっぱいあそべる?」「いっぱいあそぶんだ。」Yのこの挨拶を受けとめながら思う。「お友だちと遊ぶと楽しいよ」と手を引っぱり、背中を無理に押さなくてよかったと。「ちいさいくみきたらネ、てっぽうつくつてやるんだ」と、うれしそうに春休みに入ったY。年長組での初登園日に、どんな朝の挨拶を投げってくれるのだろうか。



雨降りの道を、小さな点が二つ幼稚園に向ってくる。小さい点はやがて、人の形となって近づく。青い雨傘に、大きめなレイン

・コート。水たまりも石ころもかまわず走ってくる。Kの登園だ。その後から傘もささず、赤いウィンド・ブレーカーを着た母親が、Kを追いかけるようにして来る。私の待つ門の前でビタッととまるK。「Kくん、おはよう!!」私の声など聞こえないかのように、後からくる母親をじつと待つ。頭からびしょぬれの母親がおいつく。「今日も大変でしたね」と傘をさしかける。

「テッタイヤンカ!!、テッタイヤンカ!!」Kが母親に叫ぶ。母親は「テッタイヤンカ!!」とくりかえし彼に言葉を返す。次は傘をもつ私に向って言う。「テッタイヤンカ!」私も同じように言葉を返す。そしてやっと「ミミズマセンセ、オハヨイマス」と首をビョコリと動かしして園庭へ入って行く。Kの朝の挨拶、朝の儀式である。Kが入園してきたのは一昨年の四月。言葉に遅れもつての入園であった。その時四歳三ヶ月、立派な体格、日焼けした子どもらしい表情、多少、おちつかずに動きまわるけれど、すぐに慣れて行くだろうと感じさせた。このKとの出会い、毎日の園生活を通して、それまでの自分の保育が問い直され、打ちくたかれていったのである。

「待つことを大切に——」「その子らしさを認めたい」「あるがままの姿を大事に——」など抱えきれないほどの思いと、確かに歩いて来た十数年の現場での子ども達との生活の体験の重さを両手

に、Kを受けとめるつもりであった。しかし、そのような思いが、いかに薄っぺらなものであったか、すぐに思い知らされた。私の考えを越えた「事」や「物」で動きまわり、奇声をあげるKを前に途方に暮れた。いったい、この子のどこから、どうしていったらよいか。いや、特別な子と見てはいけない。まず動きまわらせてみよう、それからだ——、などの思いが交錯する中で園生活が始まり、毎日が過ぎていった。

ある時、思いあぐねてKの専門的指導をしている先生をお訪ねした。その折、「何をどうしようと考える前に、誰が彼との心をつなぐことが出来るかを、まず考えてほしい」と指示を受ける。自分の小さな枠の中の行動をとらえていた私にとって、Kはやはり普通の子ではないと言う無意識の思いが心を覆っていたことを知らされた。この指示は、いつも私自身、入園する子どもに対して、こころしていた事ではなかったか。まず、あるがままの姿を認めて、安定の場をみつけさせよう。それが「物」でも「場所」でも「人」でもいいのだ、そこからすべてが始まるのだ——そう、こころしていただけないか。なぜKに対すると、これらの事が忘れられてしまったのか。指示された事柄を思いながら大変ショックだった。その事の中から、今までの自分の保育のすべてが問い直された。いかに限られた小さい枠、しかも、自

分が許容できる枠の中でしか「待つ」とか「一人一人の子らしさ」をとらえていなかったかを知らされていった。

Kを受けとめるために、もう一度、私の保育観をくだいて行こう、そのために、他の子をしつかり見直そう。子ども達の一人一人を受けとめよう、違いを知って行こう。その姿勢の中から、Kを含めて子ども達一人一人の子らしさを無理なく受けとめられるようになって来た。「待つ」ことの長さをKの時計にあわせよう。自分の言葉でなく、Kの言葉で話すことからはじめよう。私のルールではなく、まずはKのルールで。こうした歩みが少しずつKとの心をつなぐものとなっていった。「また、高いところへのぼっちゃって!」のつぶやきが、「ヨーン、先生もそこまで登るゾー」に変った頃、Kの園生活は驚くほど安定していった。Kをみつめた目や心で、他の子ども達の園生活を見直した時、彼らの何気ない行動や活動、ことばなどが、その子の今、必要な事として、まず認めて行こうと思えるようになって来たのであった。それ以後のKとの関わりは、山、また山のくりかえし。いつも、チャレンジしながらの毎日である。けれど、その都度、すべての子ども達の生活を通して答を求めて行けるようになっていく。「テッタイヤンカ!!」はKの発明語である。どんな意味だろうと考えたこともあったが、今はその時々で、いろいろな表現を

もつ「テッタイヤンカノ」を、Kと同じ表現で返してやる。Kにとつて、登園を確認する、この言葉が大切に思えた。卒園を間近にして、仲間の大騒ぎの中で「うるさいナ、もうー」と叫んだK。それまではオーム返しがほとんどだったKがである。そして、卒園の日、いつものように幼稚園の門を丁寧にしめて、「サオーナナ」と深く頭をさげた姿を目にして、今度は小学校で、誰が「テッタイヤンカノ」を受けとめるのだろうか、フト、思った。



「先生、いろ紙今日もでてない？」元気なMとD。おはようの挨拶も忘れての質問である。「そうよ、だしてないわ、おはよう／＼と返事をする。「やっばり、でてないんだよなあ」つまらなさそうに門を入った。十一月の事である。このつまらなさそうな顔には、わけがあった。その二週間ほど前、昼食後の遊びが再開されて間もなく、M達に呼ばれた。「先生、いろ紙なくなつたよ、だしてー」と。その頃、手裏剣作りが大流行、何枚もいろ紙で折っては、手の中に入れて忍者よろしくシュシュとばす。年長も年少も大好きな遊びになっていた。呼ばれて行ってみると、いろ紙箱の中には、しわをのばした、いろ紙が丁寧に入れてある。破けて

もない。「ちゃんが入っているじゃない？」と言う。「ナー、こんなのかっこ悪いもんナ」との返事。

その日から新しい「かっこいい」いろ紙は、子ども達の前から姿を消した。保育後のミーティングで話しあって、どの部屋もそうした。折ってしまった、もう遊ばないいろ紙を、ひろげて、折り目をのばして箱に入れた。たしかにクシャクシャの、しわのある手裏剣は「かっこ悪い」かもしれない。けれど次から次へと新しいいろ紙で「かっこいい」手裏剣を作って、シュシュとばす。そこに何が育つというのだろうか。「クシャクシャだつて破れていないけど——」といい続けて何日も過ぎた。「やっばり、でてないんだよ、新しいのが——」の朝のつぶやきはそんな時であった。

この手裏剣作りは大変な人気で、どの子の作り方がよくとぶとか、色がきれいだとか、何個もついているとか、大半の子ども達がまきこまれるほどであった。しかし、新しいいろ紙が姿を消した日から、少しずつ、この遊びは停滞。今まで作った分で満足、ポケットに入れていけばいい、まるで忘れられた遊びと思える日さえあった。私たちにとって大変ショックだった。あんなに夢中に作り、大好きな遊びが「かっこいい」材料が無いとまるで、今までの大流行はうそのように、忘れられた手裏剣作りとなった。そ

のことにショックだった。しかし、相変らず、クシャクシャのいる紙を出し続けた。内心、子どもの遊びをうばったかとの思いをおさえながら——。けれど、とうとう、ある日、一枚、二枚という紙箱から、クシャクシャいろ紙がなくなつて、ちよつと「かっこ悪い」けれど、でも皆の大好きな手裏剣遊びが再開された。「よかつた」と胸をなせおろしながら、これは当り前のことなのよと言つた表情で彼等の中に加わつた。「乏しさ」の中に育つ大事な事を考えてみたいと思つた。



子ども達がそれぞれの思いを持って登園してくる。ゆっくり歩いて、かけ足で、つまらなそうな顔で、一人で、数人で——そのいろいろな状態を門の前で受けとめる朝。この重さは私にとって大変なものである。「今日は元気がないナ」「少し調子に乗りすぎカナ」「また、しかられたのか」「元気でいいゾ」時には出会ひの重さにつぶされそうになる。ちよつと用事で数分、迎えの場がない時、登園して来た子ども達は、わざわざ私のところへやってくる。「せんせい、おやすみかと思つたよ」「今日ネ、泣かないできたの」この子ども達一人一人にどんな園生活を与えようとして

いるのだろうか。一人一人を、どれだけ深く知り、関わろうとしているのだろうか。自分の力の小さいことに比べて、子ども達の可能性の大きさを思うと足が竦む。重いナァと思う。その反面、もう後にはひけない気持をもっている自分、矛盾しているかもしれないが正直なところである。

フト溜息をつく、隣りからも溜息が——重くても一緒に考え、一緒に悩み、この保育を背負う仲間がいる。毎日の保育後のミーティングで、ほんの小さい出来事をも見逃さないで話し合い、積み重ねようとする仲間がいる。夢中に議論しあえる仲間がいる。そのことを思うとき、私の保育は、私達の保育なのだと思ふから思うのである。

電話が鳴つた。

「先生ノ 今日、T子がタンポポの花束もつて帰りました。私の好きな水色のリボンで結んでありました。幼稚園のタンポポなんですってね。花束なんて、何年ぶりかしら——」。母親のうれしそうな報告を聞きながら、明日の朝、どんな表情のT子を迎えられるのだろうかと思はずむ思ひになった。

(千葉県・愛隣幼稚園)

雑感



福永恭子

子供と幼稚園で過ごしました四年間のことを、自分なりに何かの形にまとめたいと思って、始めましたら、すぐに困ってしまいました。そのまま残しておきたい記録が多くて、まとめるところではないのです。それも、ちょっとした出来事（教師の意図しない活動が主ですが）や、会話だったりするのですが、それを読むと、うれしくなったり、ニヤッと笑ってしまったり、ホッと胸があったかくなったりして、私の手元から離してしまえば心が残るものばかりでした。そのため、まとめることから、書き写す作業へ

と変わってしまいました。やはり、子供といっしょにいた者としては、子供の実際の様子が一番大切なのです。ですから、もっとこまめに記録しておけばよかったと、ちょっと残念に思っています。そんな子供の様子を、ここにいくつかあげてみます。

四歳児の様子から

。入園して間もない頃、「先生、つってごらん」と大きな

声がしてふり返ると、園庭のすみにある、小さな水のはってない池の中に、なわとびを持ったYくんがいました。なわとびのもう一方は、池の外に出ています。「つるの？」と言って、私が近づくとYくんは池の中にしゃがんで、体を小さくしてじっとしています。私はゆっくりと、なわとびを引っぱっていききました。なわがピンとなり、そして手ごたえが加わって、うれしそうな顔をしたYくんが、釣れたのです。(Yくんのおもしろい、アイディアで、私は楽しませてもらいました)

。十月のある日、思い思いに描いた果物の面をつけて、子供たちは遊戯室に遊びに行きました。私は、まだできていない子供の様子を見たり、面に帯をつけたりしていました。「りんごがなっているからきて」と言われて、どうしたのかなと思いつながら遊戯室に行くと、面をつけたり、手に持った子供たちが机の上ののって、黒板から顔を出していました。(あらあら、机の上ののって)と思いつながらも、並んでいる顔にニコニコして、「どれがおいしそうな、食べてみましょう」と言って一人ずつ机からおろしていききました。(子供たちの考え出したこと

や、私を呼びに来てくれたことをうれしく思いながら、机の上ということでもちょっと困っている私の複雑な心理？が、今でもよくわかるのです。)

。春も近い穏やかな日、テラスに出してあった机を、食事の準備のために部屋に入れて並べていたTくんとKくん。「あったかい」と、ほったたを机にくっつけていました。私もほったたをつけてみたら、お日さまのおいがして、とても気持ちよくなりました。

五歳児の会話から

。N子「わたし、バレー踊れるよ」

私「じゃあ、踊ってみせて」

N子「いやだ」(すかさず)

A男「けちんぼ」

(そのあと男はバレーを踊らないという話になって)

私「あら、男の人も踊るわよ」

S子「そうだよ。女だけだったら疲れるもんよ」

思わず私は、大笑いをしてしまいました。Sちゃん

は、ちょっとげげんそうな顔をしていましたが……。

○五月頃のこと、おうちごっこをしているままごとコーナーに通じかけた私に、Eちゃんが言いました。

「わたし、K（名字）っていうのよ。だってTくんがお父さんで、わたし、お母さんなの」Eちゃんは、紙に「K」と書いてカラーブロックの門にはりました。（お父さん役の子供の名は、T・Kです。ああ、なるほど。よくわかっているわ、と大人の私が感心させられました）

○九月のある日、部屋でみんなを前に話している時、突然

Y子「先生の口、どうしてそんなに大きいの？」びっくりして、私は笑い出してしまいました。（どうしてまた急に、ウーン……ちよつとからかってみようかな）

私「みんなが修了する頃、みんなを食べるためよ」

子供「うそだ」「えー」「いやーん」

Y子「ドリルで、もっと大きくしちゃう」

私「そんなことしたら、もっと食べ易くなるわ」（Yちゃんは、ふだんなら冗談がわかるのに、今日は半

信半疑でちょっと不安になったらしく）

Y子「じゃあ、小さくする」

S男「ぼく、食べてもおいしくないよ」

（Sくんは、クラスで一番小さな細い男の子です）私が笑いながら、「大丈夫、みんなを食べたりしないわ」と言うと、子供たちも笑い出しました。（予想以上の反響に、私の方があわててしまいました）

○台風が去った、天気の良い暑い日でした。お弁当のあと、テラスで粘土をしながら、誰に言うともなく

I子「秋なのに、あついわねー。夏はさむかったのに。」近くにいたK男がI子をみずに言いました。

K男「夏は すすしかったの！」

○修了式の終わったあと、丸テーブルで数人の子供たちと話していた時、

T男「先生の顔、ポツポツがたくさんあるね」（まあ

失礼な！）

Y子「♪そはかすなんて気にしないわ、はなべちゃだつてだつてお気に入り♪」私の顔を見て、すぐ歌って

くれました。

T男「先生、鼻高いね。Y子さん、はなべちゃだね」

笑いながら、Yちゃんと私は慰められました。まわりの子供たちも、笑っていました。

感じていただけますか。こういうことというのは、その場にはないとなかなかわからないことですね。雰囲気や表情などがありますから、それらを一つずつ説明していったら、せつかくその場でつくられた「もの」、つくられつつあった「もの」が、消えてしまつて、つまらないものだけが残つて、むなしくなります。特に研究ということで、子供の活動をまとめたりすると、そのことを強く感じます。一体、何をしているのだから、これが子供のためになつているのだろうか、と。

子供といっしょにしていると、いろんなことを発見させられて、好きです。今まで私が見ていたものでも、新しい見方を知らされて、うれしくなることも度々あります。もちろん、大変なことも、いやなこともありますけれども。

幼稚園の他にも、子供と接する機会があります。姪やおばさん、近所の子供たちのお姉さん、通りがかりのおばさん(?)としてなど。通りがかりのおばさんとしても、ステキな出会いをしたことがあります。

ちょうど角を曲がった所で、小学校一年生位の髪の毛の黒い、おかつぱの女の子に会いました。めとめがあつて、思わずにこつと(したと思うのですが)して、私は真剣な女の子のまっ黒な目に、恥ずかしくなって目をそらせてしまいました。そして、すれ違う時に、もう一度みたら、その女の子も私の方をみていました。きつと、私も女の子に負けない位いい顔をして、私の気持を表わそうとしていたと思います。

どんな時にも、子供と共に喜びや楽しさを感じられる心を持つていたいと思いますし、自分の人生を振り返った時に、いつでも、子供たちとの楽しい思い出が、たくさん残っていたら、うれしいと思います。

海ほおずき

縁日や海水浴に出かけた海岸では、赤や黄に染められ麦藁のカゴに入って、海ほおずきが売られています。まだ小さかった私には残念ながら吹き鳴らすことが出来ませんでした。でも、それでも一つ口に含んでは、母に鳴らしてもらいながら舐めまわしていました。

一体あの時、口の中に入れて嚙んだり、しゃぶったりしていた海ほおずきとは、そもそも何だったのでしょうか？ ヒジキのような海藻だったのでしょうか？

どんなものにして海で採れるものだろうと思っていました。しかしそれが、海に住む貝が産みつけた卵の囊であることがわかったの

は、最近になってからのことです。夏休み八月号の児童文化探訪は、季節にふさわしく海の香りをいっぱい吸い込んだ海ほおずきのお話をお届けすることにいたしました。

ほおずき問屋の西多商店

ナス科の宿根草である酸漿は、日本各地に昔から自生している植物です。まっ赤に染まった袋を開き、キラキラ輝く珠で酸漿人形など作りますが、この珠を大事によく揉んで、中の種子をそっ

と上手に出し、口に含んで鳴らすということも、今にまで伝えられた子どもたちの遊びです。漢方では酸漿は、小児の虫くだしや疳かの妙薬とされているそうです。口の中で苦味にがみを舐なめたりしながら、子どもたちは遊びの中で自然の恵みを味わってきたのででしょう。

海ほおずきは、植物の酸漿を真似て考え出されたおもちゃのようです。江戸時代の十八世紀半ばには、すでに「海ほおずき」という文字が見うけられ、子どもの遊びや玩具について書き記された十九世紀中頃の書物にも、海ほおずきことが述べられています。

さて、海ほおずき屋さんを捜していたところ、玩具問屋の古老に、海ほおずきを昔から商っていたという卸商の西多商店を教えただきました。そこで早速、まずは西多商店を訪れてみました。

西多商店は、今、蔵前三丁目にあります。昔は神田多町であり、丹波酸漿と海ほおずきから始まったおもちゃ問屋の老舗です。夫に早く死なれた西村ハル（一八四六年・弘化三年生れ）という人が、明治二十年かから、海ほおずきを戸板に並べ、丹波酸漿と共に、ほおずきを専門に商売を始めました。西村ハルさんのお孫さんにあたる塚田知三さんの話では、丹波酸漿は夏から秋

にかけての一時期だけのものですが、海ほおずきは貯えておくことができ一年中商えるので、丹波酸漿と海ほおずきをいっしょに扱ったのだらうということですね。

海ほおずきは明治の頃、檜の盤はん台に入れられ、流ながしの人達が花柳界を中心に売り歩きました。そして品が悪く売れなかつたりしたものも、縁日が立った時などに売られていました。花柳界の女人は煙草を吸ったりして口淋しみしいことがあり、また口を動かしていると肩が凝こらないと言われ、海ほおずきを口に含んでは巧みに鳴らしていたそうです。芸者さんが買うものですから、海ほおずきの値は高く、品物が届くのを店先で待っていた流ながしの人達は、競うように品の良いものを求め、西多商店は大いに儲もちかったということを、おばあさんのハルさんは知三さんに昔語りしたそうです。

西多商店に昭和の初め頃から奉公に入り、海ほおずきの商いにも関係したという斎藤秀次さんは、流ながしで売られる長刀ながたほおずきという種類の海ほおずきが、他の種類に比べて高価で、百匁もめいくらではなく、一本二十銭、三十銭、上物で五十銭で売れたと話していました。五十銭というお金で当時、電車に乗って映画を観て、食事をしてまた電車に乗って帰って来れたということです。

さて西村ハルさんには子どもがおらず、夫婦養子を迎えて店を任せてゆきます。その養子となったのが西村多吉さんで、以後、西村の西と多吉の多をとって西多商店となります。西村多吉は長男にも同じ多吉の名で店を継がせ、知三さんには、奥さんの方の実家の塚田の姓を継がせました。

初代の西村多吉は、ほおずきだけではなく、ゴムほおずき、ゴム風船、ゴム鞠、ゴム動物とゴム製のおもちゃを扱うようになります。それがあって現在の西多商店はゴム風船の専門店となっています。

明治の頃、主に花柳界で売られ、縁日やお祭りなどでもだんだんと売られるようになっていった海ほおずきですが、子どもたちの間に広く普及し出したのは、昭和五、六年からのことです。二代目の西村多吉さんは、朝鮮半島から安い海ほおずきを仕入れ、赤や黄色に染めて駄菓子屋やおもちゃ屋の店頭に大量に出回らせました。朝鮮産のものは、薄くて破れやすかったのですが、値段が安かったために何百万個と売れ、海ほおずきの最盛期がやってきました。

しかし、やがて戦争が近づくにつれ、海ほおずきの姿は消えてゆき、戦後になっても花柳界で売れなくなり、流れて売って歩いていった人たたちもいつかなくなつて、主に縁日で細々と売られるよう

になつていきます。

海ほおずきの種類

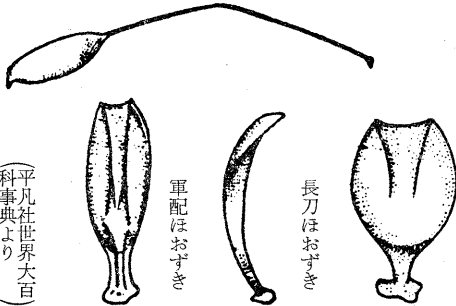
海に住んでいるアッキガイ科やエゾバイ科の巻貝は、水はもとより酸にもアルカリにも侵されにくい囊たぶらに入れて、春から夏にかけて卵を産み出します。その卵の囊が海ほおずきになるわけですが、囊の形は貝の種類によつて異なり、その形の違いにより海ほおずきにもいろいろの名がつけられています。

以下、海ほおずきの種類を紹介していきます。

ふつくらしているところから「おかめほおずき」と言われるのはテングニシです。

細長く長刀ながなたのような形から「長刀ほおずき」と呼ばれるのはアカニシ。

チャンチャンほおずき



おかめほおずき

長刀ほおずき

軍配ほおずき

(平凡社世界大百科事典より)

ナガニシの卵籠は、やはり形から「軍配ほおずき」または「さかさほおずき」と呼ばれます。

これら三種類が海ほおずきの主なものですが、他にも、中国人の弁髪に似ているところからつけられた「チャンチャンほおずき」や、「アワほおずき」、「とっくりほおずき」といったものがあります。

二代目の西村多吉さんや西多商店にいた齋藤さんの話では、戦前、近在では千葉県の青堀海岸の漁士さんから海ほおずきを仕入れていたそうです。しかし、それは比較的安物で、上物は瀬戸内海の明石や玉島、能登などから荷が来しました。花柳界で売られるために、長刀ほおずきは高価なものだと述べましたが、明石や玉島の漁士さんは、長刀ほおずきの親貝アカニシを少し沈めた舟にひき上げ、舟のまわりにびっしり卵を産みつけさせて人手をかけて大きく育てていたといいます。卵籠は今にも孵かえろうとする直前に一番大きくなり、そこをとって上物の長刀ほおずきにしたのです。

西多商店から杉田さんへ

西多商店は、海ほおずきの卸を昭和三十二年頃までやっていた。しかし以後手をひき、それにかわって海ほおずきを縁日などで売る露天商だった杉田さんが、卸商を受け継ぎました。そこで親の代から海ほおずきを始めて二代目という杉田善次郎さんをお訪ねし、海ほおずきの最近のお話をお聞きしてみました。

それによると、ここ五年位の間、海ほおずきがめっきり採れなくなり、卸商という看板をあげていられなくなり、商売替えをしたところだということです。五、六年前までは、九州の大分や宮崎で沢山採れていたそうですが、海岸線に沿った道路工事などで海岸の地形が大きく変えられ、また海が汚れてきたこともあり、貝が海岸の浅瀬に卵を産みに来なくなり、海ほおずきが手に入らなくなってしまうのです。

現在のところ、有明海ではほんの少しは採れています。全国の縁日に回すだけではなく、昔から丹波ほおずきといっしょに並べ、海ほおずきも売出す浅草の四万六千日のはおおずき市に向け、危ぶみながらもどうか品を集めているところだそうです。こういうわけですから、今、海ほおずきは一两百円以上もする高価なものになっています。

杉田さんはお父さんの後を受け、終戦後の昭和二十八年から海

ほおずきの仕事をしています。そこで少し昔をふり返っていただ
きながら、当時から今までのことを語っていただきました。

それによると、戦後も房総の青堀（今の富津）で、おかめほお
ずき、長刀ほおずき、さかさほおずきが沢山採れていました。千
葉のものは皮が厚くいいいものではあつたそうですが、小粒で、千
葉産のおかめほおずきを「まる」、さかさほおずきを「麦」と呼
んでいたそうです。

その他備中（岡山県）の玉島や、四国の丸亀でも採れました
が、大きなものであつたものの、皮が薄くて破れやすく、いいもの
とは言えなかつたそうです。さかさほおずきを玉島では「軍配」、
丸亀では桜の葉っぱのように大きききれいだったところから「さ
くら」と呼びました。

良質な海ほおずきとは、貝の卵の囊が厚く丈夫で弾力性に富ん
でいなければなりません。そうなると静かな瀬戸内海よりも波が
荒い太平洋の海で採れたものの方がよく、大分や宮崎のものが一
番良い品だったそうです。

現在では有明海でおかめほおずきがほんの僅かに採れています
が、長刀ほおずき、さかさほおずき、チャンチャンほおずきは採
れません。昔、花柳界で盛んに売られた長刀ほおずきについて
は、杉田さんが次のように語っていました。長刀ほおずきの親貝

アカニシは、あおやぎの貝の馬鹿貝を食べるため、漁師さん達に
目の敵にされ、採られては貝殻の巻貝を喇叭のおもちゃにされて
しまった。喇叭のおもちゃは江の島などで海岸みやげとして盛ん
に売られ、そうして親貝が採り尽くされたというのです。

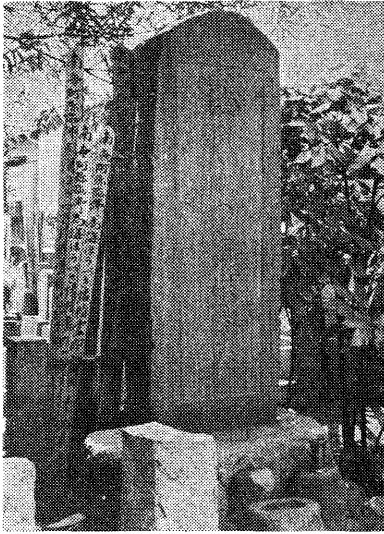
さて海ほおずきの音色ですが、みなそれぞれの種類で異なつて
いるらしく、おかめほおずきなどは、上手な人は奥歯で鳴らし、
蛙かずの河鹿のような音を出すということです。長刀やさかさほうず
きは、おかめほおずきに比べると鳴らすのが難しく、杉田さんは
「僕でも鳴らせないよ」と言っていました。

「チャンチャンほおずきも難しいのですか？」と尋ねると、こ
のほおずきは薄くて破れやすく、百に一つしか使えないものになら
ず、だから鳴らすの難しいということです。杉田さんは「これは
何イカだか忘れたが、イカの卵の囊だもの」と笑い、チャンチャ
ンとかあわほおずきは鳴るものではなく、赤や黄に染め、色どり
で売るハッタリネタだと教えてくれました。

海ほおずき養塚

海ほおずきは、中に入った貝の卵を殺して作ります。殺生とい

うことで商売をしていた海ほおずきに関係した人々は、そこで、海ほおずきの供養塚を建て、年一回供養の法要を営みはじめました。昭和十六年に建てられたというこの供養塚は神楽坂の光照寺にあり、塚の背面にある発起人の名前などから、当時の生産地である千葉県青堀と備中の漁業関係者、縁日などで商売をしていた露天商三十数名、また卸商の名を窺い知ることができません。今回の取材に協力して下さった二代目西村多吉さんや斎藤秀次さん、そして杉田さんのお父さん杉田福太郎さんの名はしっかりと刻まれています。しかし、海ほおずきがやがてなくなりつつあるというのですから、この海ほおずき供養塚は、かつて海ほおずきとい



神楽坂光照寺にある海ほおずき供養塚

うおもちゃがあったという名残をとどめる塚になってゆくのかもしれません。

神楽坂に光照寺を訪ね歩き、そこがかつて芸者町であり、そして古く明治の頃は海ほおずきが芸者衆と深いかわりがあったことに思いをめぐらしていました。気がつけば泉鏡花の小説『婦系図』の冒頭は、お蔭が海ほおずきを皓齒しほはで器用に鳴らす描写から始まっていたのでしようか。そのお蔭のモデルとなった鏡花の愛人でもあり後に妻となった芸者桃太郎は、神楽坂の芸妓なのでした。

「ほおずきは どうにもへたな男の子」 このほおずきは植物の酸漿ですが、酸漿を吹き鳴らす遊びは昔から男の子より女の子の遊びとされていたようです。海ほおずきが花街の中から生まれた遊びと考えられますし、女性とほおずきのかかわりが、うっすらと細い糸として見える時、遊びの世界の歴然とした男女の違いを謎めいた興味で見つめたくくなります。

*
*
*

O・F・ボルノウは、その著書『希望の哲学』（新紀元社）の中で、ドイツ語には、知性に当る語に、二つの異なった意味の語があると述べている。その一つは悟性と訳される *Verstand* という語であって、理解する能力や技術を指す。悟性は、それ自体としては、善いものでも悪いものでもなく、「むしろただ、役に立つ道具にすぎない。」だから、「冷い、計算的な悟性は、罪ぶかい激情に仕えることさえできる。」戦争に奉仕する科学はその一例である。それに対して、理性と訳される *Vernunft* は、これとは違った成り立ちを持っている。これはもともと、「聞く」という語から由来する。本心に立ちかえるというときの本心は、ドイツ語では、理性という語に置き換えることができる。自分の本心（理性）を失って、何かに憑かれていた人、「そんな人間とは誰も話ができない。彼は、自分の興奮から生れた孤独の中に閉じこめら

れて、他人が耳許に伝える理性の声を、もはや全く聞くことができない。」しかしその人がまた理性にかえる（正気にもどる）と、再び「話せば分かる男」になる。こういう理性は、先に述べた悟性の上に立つものであって、「和解の精神をもって双方から歩み寄りながら、対立の克服を求め」共存の可能性を作り出す。理性をもった人は、自らの本心に耳を傾けつつ、他人との間に共通な世界を作り出そうとする人である。

このボルノウの知性論に教えられる所は大きい。悟性だけを訓練して、理性を養っておかないと、本来は高貴な理想も一方的になり、排他的にならねない。子どももおとなも、自分の本心に立ちかえて生きることを必要としている。日頃の忙しい生活の中では、知らぬ間に何かの観念や欲にとりつかれて本心を失っていることがある。夏休みには「閑を志す」ことの大切な所以である。（津守）

幼児の教育 第七十八巻第八号

八月号 © 定価二五〇円

昭和五十四年七月二十五日 印刷
昭和五十四年八月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

111 東京都千代田区神田小川町三ノ一

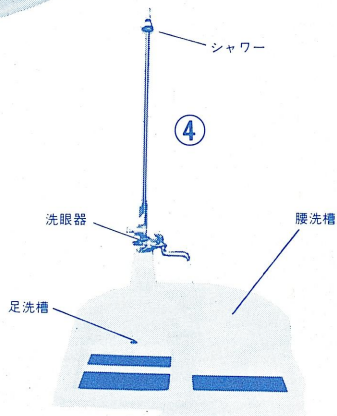
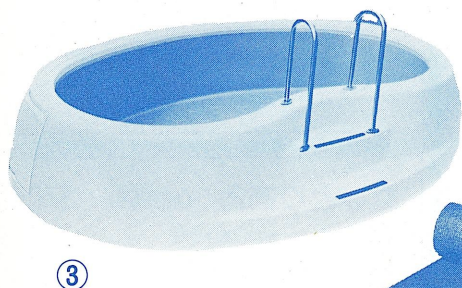
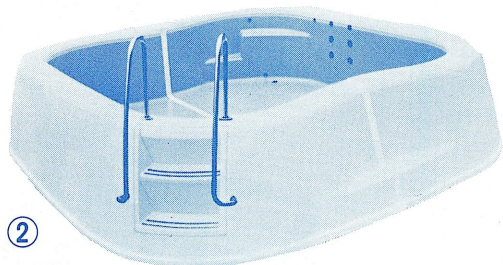
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

あつ〜い夏! だ・い・す・き



① KP-50型

循環ポンプなし
813,000円

循環ポンプ付
907,000円

FRP(強化プラスチック)
水位3段切替
(30cm・45cm・60cm)

② KP-35型

循環ポンプなし
577,000円

循環ポンプ付
671,000円

FRP(強化プラスチック)
水位3段切替
(30cm・45cm・60cm)

③ KP-15型

252,000円
FRP(強化プラスチック)
水位2段切替
(30cm・45cm)

④ シャワーセット

91,000円
FRP(強化プラスチック)
高さ160cm 幅130cm
長さ130cm

シャワーと、洗眼、
腰洗い、足洗いの機
能をひとつにセット。

⑤ 人工芝(A)

80ピース入 28,800円
EVA樹脂 ユニット式
1ピース 15cm×30cm 厚さ3cm

⑥ 人工芝(B)

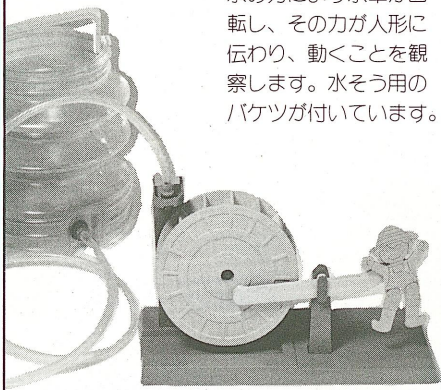
69,000円
塩化ビニリデン ロール
幅1m×長さ10m 厚さ8mm

子どもたちの夏休みがより楽しく!!

● キンダー科学教材 ●

すいしや(折りたたみ式バケツ付)250円

水の力により水車が回転し、その力が人形に伝わり、動くことを観察します。水そう用のバケツが付いています。



● キンダー科学教材 ●

ふね(すいりく両用) 250円

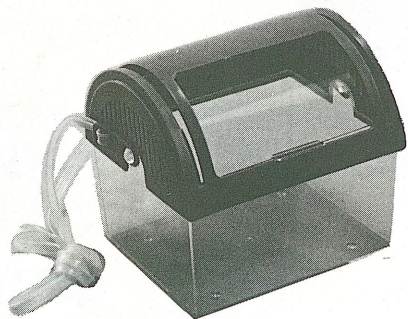
ゴム動力によるプロペラ船です。車輪付ですので、床の上も走ります。プロペラの回転により風力が生まれ、船が進むことを観察します。



● キンダー科学教材 ●

かんさつケース(おしかがご兼用)250円

昆虫や生物の採集・飼育を通して、自然や生き物に対する関心を高めます。透明部分が多く、観察しやすくなっています。



むしとりあみ (捕虫網) 370円

三段切替で、網と棒とが簡単に取りはずせ、旅行、レクリエーションにも手軽に持ち運びができます。

棒：プラスチック 網：ナイロン

